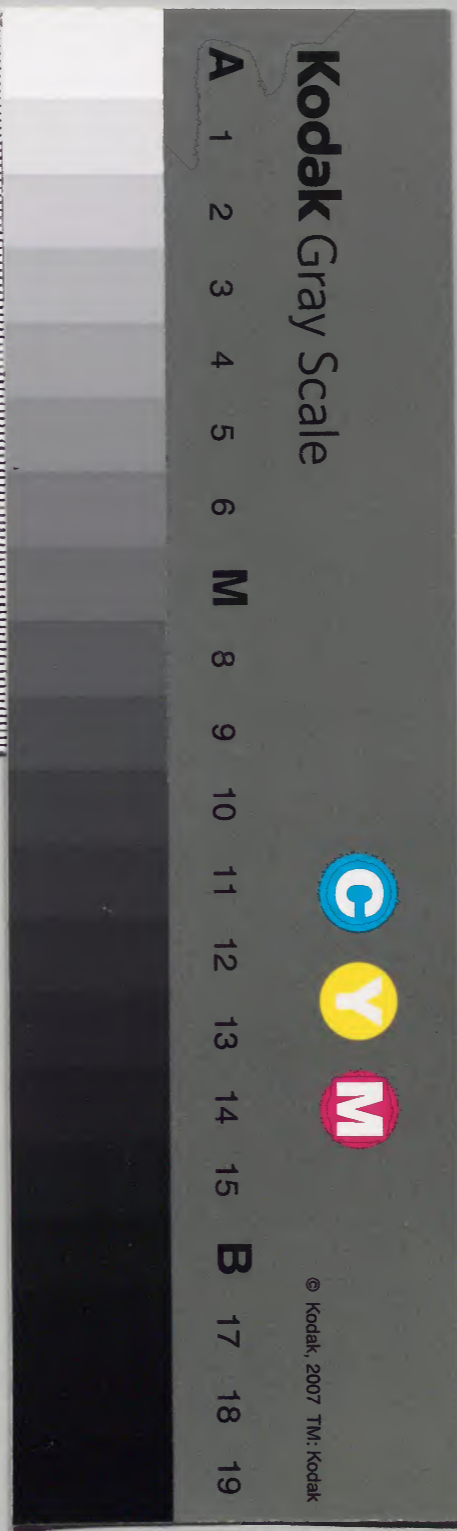


武家名目抄 職名部六上中下十二十三十四

和書門			
一六四二五	三四二	二	二七
號	函	架	冊

內閣文庫			和書
一五四二五	二四二	二七	
號	冊	架	

內閣文庫	
番號	和 16425
冊數	27 (7)
函號	153 277



武内名目第九册

職名部五上

後見



將軍次第云前右大將源朝臣賴朝卿治世
平後見時政右大臣源朝臣實朝治世十七
下東阿見時政後義時家系

源朝臣實朝治世十七

後見時政後義時家系



後見

家司

下家司

家務



武家名目抄第九冊^{十二}

職名部^{五上}

温
敬
堂
藏

職名部^{五上}

淺草文庫

後見

將軍次第云前右大将源朝臣頼朝卿治廿

年後見時政右大臣源朝臣實朝公治十七

年後見時政後義時

増後新島源朝臣源朝臣實朝公治十七

源朝臣源朝臣實朝公治十七



頼朝
大将
後見
軍
義時
御後見
時房
守
元仁
元年
奉
御後見

將軍執權次第云泰時武藏元仁元年任父

左讓補御後見時房相摸元仁元年奉御後見

加合判

吾妻鏡云元仁元年六月廿八日武州始被

參二位殿御方相州武州為軍營御後見可

執行武家事之旨有被仰云

關東評定傳云修理權大夫平時房朝臣

承久三年六月入洛以後於六波羅執行武

家事元仁元年六月義時朝臣卒去之間下

向關東為軍營御後見連署

吾妻鏡云仁治二年十一月廿日癸丑駿河
四郎式部大夫家村上野十郎朝村被止出
仕昨日喧嘩職而起自彼等武勇去々凡就
此事預勘發之輩多之雖非指新親昵只稱所
縁相分兩方與本人等同令確執之故又北
條左親衛時賴者令社候人帶兵具被遣若狹前
司方同武衛者不及被訪兩方子細依之前
武州御諷詞云各將來御後見之器也對諸

家人事爭存惡親衛所為太輕骨也暫不可
來前武衛斟酌頗似大儀追可有優賞云々
將軍執權次第云時賴左近寬元四年閏四
月一日讓得舍兄經時跡為御後見重時相
守寶治元年奉御後見加合判
吾妻鏡云寶治元年八月一日辛巳恒例贈
物事可停止之由被觸諸人令進將軍家之
條猶兩御後見之外者禁制云々

うらね巻

増後云。若君とて日なぐ申物軍乃宮首小れ
かゆたさうまひ頼つくと名は是後赤河の頼長
かごー入道ーとむまの内より是の初長也
とて譲りしーはけは天乃ーのあつと
けお掙さし頼の頼長つー海川まー
かーらたものたれ目出度史之れとあつと
はくもれもかき後ひ大々々せし静小つと
海はすまーあり

旅宿問答云頼嗣將軍ノ御後見最明寺ハ

平時政二男ニ義時義時一男武蔵守泰時

泰時嫡子修理亮時氏二男也舎兄ノ經時

ニ被讓跡成御後見俗人ニテハ相摸守時

頼卜申セ之也天下ニ無隱慮直ノ人也

將軍執權次第云政村陸奥建長八年三月

日為御後見加合判按年書連署といふ所後見と記さ

後見と云ふは後見といふ連署を云ふと

つ小合判建判加判を云ふと

又云時宗左馬文永元年八月十一日以後

令加連判同五年三月五日以後御後見師

時右馬正安三年八月廿三日奉御後見基

時讚岐正和四年七月十一日御後見事被

仰下守時相模嘉曆元年四月廿四日奉御

後見按時宗以下人皆執格なり

按松浦言執格乃才多き事なり時政義時亦あり

河氏時時頼時宗時高時以之九代皆以將軍の

中極えとて政務成りて天下を治め武能

相持西國乃も成り申職しとて一族の井也

若用を撰ひ著しとて所下文不知も將軍の

作らるるに依りて中極しとて按以上十二條藤原將軍家の位之なり

侍所此法篇言先例條一當御代法谷山を去り

息二人相共子あり存ありて交稱之宗被盜馬之地

本間方衛門尉後見一人本間御母と郎等一人而小

平右自馬を引為りて間依被答揚件下手人於

少子... 斬首... 略中 文永六年十一月十

四日被仰也

異本伯耆卷云去應長元年 = 關東ノ執權
相摸守貞時逝去七之カハ息男高時若年
ナレハトテ其間大佛宗宣熙時等加判ニ
テ執權ノ司 = 代テ天下ノ下知ヲ成ス 中略
貞時最後ノ時長崎入道圓喜并秋田城介
時顯等 = 後見ヲ申ニ置ケレハ兩人政務

= 代リテ代ノ掟ノマニ行ヒケレハ如

形無為ニ治リケル 抄上ノ二條ハ濃金殿
の内後取の後見ナリ

太平記云 師冬自
害條 播州師冬八箇國ノ執ヲ

被催 = 一騎七不馳寄角テハ叶マニサラ

ハ左馬頭 基氏 ヲ先立進セテ上杉ヲ退治セニ

トテ僅ニ五百騎ヲ率ニテ上野ハ發向候

ニ路次ニテ憑坊タル兵共心替ニテ左馬

頭殿ヲ奪奉ル間左馬頭殿ノ御後見三戸

七郎師親ハ其夜同士打セラレテ半死半生ニ

候ニカ行方ヲ不知成候按作ハ基氏の執りタカクニ戸氏ニ行

族多ク成以テ後見イけたぬくト

應仁記云若君誕持豊入道此御文ヲ給リ

急度思出ニケルハ細川右京大夫勝元今

出川殿ノ後見トニテ御父ノコトニ又ナ

ラフ人モナク計ヒ沙汰ス今出川殿公方

ニ居リ給ハク我等力為ニ悪カルヘニ云

云按今出川殿ノハ意照屋敷の合身義親後之視る出川ノ後見ト

後見ト後見トト

北條伊豆早雲平代記云氏由北條ト

惣領勢与平氏トトト

盛名トトト

中トト

十トト

カトト

山崎及乃味方小系一由入軍法にまゝあり
了け走とも東者共一一人山中宮東のめ
もあひくよあしせん
衣古金ぐりま上巻氏公はゆ乳母子た
より心もたもまて
紙後お房あまとりこれ湯倉乃山後見まで
山の内及と祖是也

又云應永十七年六月のころ後より公方備^満意

山崎幸以の外より七月廿二日山崎廿二
に中山早世あるは犬越くは願朝宗入道
禪助より君代わくそとて中七十よとよ
また山後見はくあまも山崎山崎は河より
やの敷小のたうた僧衣をもと一則上徳は
長柄と括発ちたは原居より
東乱記云氏綱公方ヲ氏綱=最愛ノ女ア
^{舞=取ル}條
り古河ノ公方左馬頭高基御家督ノ晴氏

ノ御臺所ニ成申サントテ此旨被仰下氏
細辞退アリシカトモ重テ御使アリ昔伊
与入道頼義奥州へ御下向ノ時上野介直
方カ智ニ成玉ヒ八幡太郎以下ノ君達出
來玉へリ源氏今ニ繁昌ナリ亦頼朝卿流
人ノ時時政ノ智ニナリ御子孫日出度ト
ミエタリ其ヨリ北條モ權勢ヲ九代マテ
トリニタメニ上下日出度吉例ナレハト

カク宮仕ニ參ラルヘニトテ御迎アリ北
條殿ヲ公方ノ御後見ニ御頼アリテ御代
ヲ治ラルヘニトテ兩方トモニ御祝着ハ

カキリナニ

栴上三條は東公方取の後ニカキ
その内上の二條は東末後取のノケナリ

大岡記云

秀吉は与柴田勝
親及津楯記條

秀吉と徳川左兵衛

一着縁者の事ウレハお議ノ理もろ秀吉
今も君を安古小並ともりの進後見として
下ノノ裁判りゆし至ふ及是罪事有也記る

織田二十信孝に付る増中上秀吉と押下さん
計 斗けりゆく申す母友長村長秀へ世継に
与し金遣ふ人と申するるれみれゆらん吉就川
指し有たよりの信孝より之宅中記を以てあ田り
作すれい書秀吉より作せ元よし世に書君と秀
吉有る中成りしるるるるりしるるるるるる
阜へ此を度しし成るるるるるるるるるるる
心なかりし中成りしるるるるるるるるるるる

後見と信孝の持也のくす河治も及ぶ其君は幼稚
くふいぬに由流深しるるるるるるるるるるる
らんやと申す山と云ふと云ふと云ふと云ふ

勢州軍記云天正十八年庚寅關白秀吉伐
北條父子滅之依是四維上下悉成其藩屏
木造左衛門具康者為岐阜黃門秀信之後
見賜^賜二萬五千石 按之上二條の織田
此は信孝より
大周記云 信孝より其母
衣々元條 大正奇教一に加賀大綱云

舟固記云政元病氣ノ比一家ノ人々評定
ニテ阿波國守護人細川讚政守之勝ノ息
男アリ是ヲ政元ノ養子ト可被定ヨニ藥
師寺ヲ御使ニテ御契約アリ是モ公方ヨ
リ一字ヲ賜リテ細川六郎澄元ト名乗ケ
ルカクテ澄元モ阿州ヨリ上洛アリ讚政
守殿ヨリ三好筑前守之長ト高畠興三ト
ハ共ニ武勇ノ達人ナレハトテ輔補佐ノ臣

ニ相ソヘラレケリ藥師寺ハ改名ニテ三
郎左衛門ト號ニ政元ノ中ニ人モナケニ
フルマヒケルニ三好カ六郎殿ノ後見ニ
上リ萬ツ藥師寺カ權ニモ不恐有ケレハ
安カラ又事ニ思テ人々ヨリ合評定ニケ
ルハ六郎殿御代ニナラハ三好又權ヲト
ルヘニ政元ヲ生害ニ申丹波ノ九郎殿ニ
家ヲ継セ各々天下ノ權ヲトラコト評議

一決云云云々
新田老談記云上州相生ノ城主相生大炊
助殿ハ御世継ノ御子息依無近國ト云御
一家ナレハ下野國佐野ノ城主天山殿ノ
舍弟又次郎殿ヲ御養子ニ被成佐野ヨリ
御供ニハ荒井主税助茂木右馬之丞山越
出羽守津苅子刑部右四人為御後見付來
諸仕置ヲ任セ家臣ヲ勤ル也

會津四家合考云 岩城常隆 逃去條 佐竹義重ハ古

殿ノ御一門ナレハ彼三男忠次郎殿ヲ御

養子ニナシ進セ義重ヲ善キ後見ト頼進

セニニ岩城郡ノ内ニ於テ何者カ愚意ヲ

先ニスル者ノ一人モ有ニ云々

小條代記云 園山保太郎本 下條花討死條 若武者ハ何々

其忽乃働あり是才一い々々改変ニ上分別

ナク若愚のつゝ海へる一々種小名考

然るを後見付の、切札の時乃為也

丹田氏文書云今夜半久相送之衣園之志内

多岐多名山後右信尤之山北去以東多武者

し後山の勝宗を殺し働て有る好むる之打

死後之る見指引多一と後後於有るさす

中老とて後之月十八日丹田因懐後之改花

○按ず小引多、中條多代死と急考するに因懐、甚月の後

見とけ後之る、一とて、好むる又後之の多と一とて、

善に載る後考多、丹田氏以上後不坂

田の所より半久の地、常陸一とあり

駿府記云慶長十六年十月六日巳刻為御
放鷹令赴關東給九日本多佐渡守為御迎
出向有江戸御雜談本多上野幕府御後見
也

按後之、輔佐の義あり、これ左京後舍殿の時也

執持の人とて、ひく、後見とつ、連署の感也

多水、後、い、水、も併せて、再、御、後、と、稱

き、う、於、他、乃、軍、執、持、之、手、の、記、れ、あ、を、こ、る、に

時折沼村まゝに執槍連若つりまもゆきと
 可きまもゆきと後そ執槍とのまゆきと
 記し連若のくんと合判加判のまゆきと
 後之の稱とむきられぬ因つりた時折沼村
 のまゆきと後打但きまゆきとゆきとまゆきと執
 槍のまゆきとまゆきとまゆきとまゆきと
 せぬゆきまゆきに執槍の威槍つりまゆきと
 連若のまゆきと^後まゆきとまゆきとまゆきと
 後まゆきとまゆきのまゆきとまゆきとまゆきと
 相殿のまゆきとまゆきとまゆきとまゆきと
 若師のまゆきとまゆきとまゆきとまゆきと
 高付若師のまゆきと傳の威槍のまゆきとまゆきと
 つりまゆきとまゆきとまゆきとまゆきと
 稱まゆきとまゆきとまゆきとまゆきと
 上代つりまゆきとまゆきとまゆきとまゆきと
 らまゆきとまゆきとまゆきとまゆきと

山身の別々〜補佐の人とて志のさう入り
又是つふつ欲のさるるを〜知弱く〜申
事務方と爲すは〜所二門同業の
く是洞悉小能〜教ぬを補助きり〜も
治る〜つ〜或い運命も〜てあるまの者
持南はるん能き〜武士とも志のつ〜の
以事〜名録固〜志のさるる〜何
る〜と〜職名もあ〜る〜何〜凡

〜治〜の志〜
〜志〜
〜志〜
〜志〜

家司

吾妻鏡云建久三年八月五日乙巳令補將頼朝
軍給之後今日政所始則渡御家司別當前
因幡守中原朝臣廣元前下總守源朝臣邦
業令民部少丞藤原朝臣行政案主藤井俊

長知家事中原光家大夫屬入道善信筑後
權守俊兼民部丞盛時藤判代邦通前集
人佐康時前豐前介實俊前右京進仲業等
候其座千葉介常胤先給御下文而御上階
以前者被載御判於下文訖被始置政所之
後者被召返之被成政所下文之處常胤頗
確執謂政所下文者家司等署名也難備後
鑒於常胤分者別被副置御判可為子孫末

代龜鏡之由申請之仍如所望云々

按此司の内
信以下仲業よりして七人の同位に
光家よりして一人の同位に
實朝

又云建仁三年十月九日甲辰今日將軍家

政所始也午刻別當遠州廣元朝臣已下家

司各布署政所民部丞行光書言書令圖書

允清定成返抄

又云文曆元年七月六日仰家司等召起請

是奉行事不謂親疎不論貴賤各存正儀可

致沙汰之趣也其衆十七人前山城守藤原
秀朝前山城守中原盛長散位大江以康散
位三善康持民部大丞三善康連中務丞大
江俊行彈正忠大江以基大膳進大江盛行
左衛門尉惟宗
同重通兵庫允三善倫
忠藤原賴俊沙弥行忍惟宗行通三善康政
改康宗○按ふは内康連の稱を元を以てし康と
改ふ所は亦あふあふのあふく〜月〜とあり
花營三代記云康曆二年十二月十五日右

大将義滿家御并賀散状并路次儀略家司惣奉

行攝津掃部頭能直按能直は評定元久より家司惣
奉行より年々家司よりあつた

あつた
普廣院殿御元服記云永享二年七月廿五

日甲子大将御并賀供奉行列出仕人々伺

候次第并躰踞略家司役掃部頭滿親為先
規欵

固小路按伯親は能直の男能直
の子なり評定元久より

慈照院殿大将并賀篇目云武家奉行人攝

津掃部頭之親可致沙汰條々注折紙遣之
御拜賀條々一供奉人等御訪用脚事一御
後官人三人事一衛府侍十人事一帶刀十
二番事一御路掃除并浮橋事一地下前駈
番長一負御馬十四匹事一同御總被付十
四具事一移鞍四具事以上先度所見如此
此外一騎打人々事侍所供奉并辻固事同
申御沙汰候欵政所奉行可致沙汰條々注

折紙遣飯尾下總守為數許御拜賀條々一
鋪設翠簾長筵等事一隨身所帳事一御笠
持并御笠袋御茵等事一御沓柳宮事一松
明事以上
抄之親の御祝の子うりて御業もて成り
御司役もたりと執仕さうりたり
本文も御司乃文ありと之とも爰も取む但し以て
評定元をり人等とて御司といひて御司は
かくなり御司の規式の内小條に抄御氏とて以後と
御仕さうり例とありて御司は御司は御司と
足利家官位記云鹿苑院殿義永和四年三
月廿四日任權大納言同年八月廿七日兼

右大将康曆二年正月五日叙従一位永徳

元年四月廿九日補家司七月廿三日任内

大臣抄るに家司とあるは評定元事なり人等つゝ人にて候
一は鹿苑院殿播磨守の例に依りて家司の友と

いふは家司と補きしは一といふは小評定文に依りて
あるは家司と名稱同一といふは家司と名稱同一といふは

とていふは家司と名稱同一といふは家司と名稱同一といふは
家司といふは家司と名稱同一といふは家司と名稱同一といふは

薩戒部類私要抄云右馬權頭康任為室町殿職事

實前關前内大臣義持殿仰送消息云來月九日

為寶幢寺供養大臣可有御出為前駈可令

參仕給之由被仰下候也恐惶謹言後正月

八日謹上中山中将殿右馬權頭康任於公

卿者家司蔵人權辨宣光相觸之件狀云來

月九日可有寶幢寺供養可令參仕給之由

前内大臣殿御消息所候也仍之如件傳聞

旨如此猶可尋注也抄るに家司とあるは評定元事なり人等つゝ人にて候
一は鹿苑院殿播磨守の例に依りて家司の友と

普廣院殿大将并賀雜事云一奉行人等事

家司丞相御并賀之時被補之雖然今度為
家司催沙汰此儀攝政所被計申也云

丞相御拜任已前云職事同所司同一御所
康曆佳例不及沙汰

侍一政所一下家司一下召使一廳召使數人

不立也今度召置一人召遣嗣
光者也○按嗣光等召司云々

普廣院殿左大臣拜賀記云永享四年八月

廿八日室町殿内大令轉左大臣右近大十

二月九日左大臣殿御參内有御參賀儀次

御參仙洞有御拜之儀云々申沙汰傳奏萬

里小路大納言時房卿奉行家司頭右大辨

忠長朝臣也辨少納言兩局等參候床子座

兼日被催之載折紙傳奏被伺申任御點被

催之音

薩戒記云永享四年十二月九日甲午今夜

左大臣殿轉任拜賀并著陣中御拜賀并御

著陣御次第當日家司覽日時勘文次御裝

束を著給次御參内の儀例の

足利家官位記云慈照院殿義寶德二年三

月廿九日任權大納言享德二年三月廿六日叙從一位康正元年八月廿七日兼右大將長祿二年四月十六日補家司同年七月廿五日任内大臣
康富記云寶德二年七月五日丁未是日室町殿著直衣御參内也未剋出御於正親町東洞院與土御門間打陽明門代於此所有御下車迂固如例還御秉燭也御出奉行布

施民部大夫貞基飯尾左衛門大夫為數兩人也傳奏中山中納言有輕服今度不被出仕申仍藏人權右中辨綱光為家司被奉行之公卿殿上人地下前駈衛府侍帶刀衛府長官人等交名已下悉見散狀了中公家散狀之端作御直衣始扈從公卿
武家奉行書出散狀之端作御直衣始御參内供奉帶刀如此

慈照院殿大將拜賀篇目云康正二年二月
十六日丙辰參室町殿被仰下云來七月幕
下御拜賀事可申沙汰者可為永享度御例
者申畏承之由中兼日可伺宣事一奉行家
司事永享度親光卿記云相御拜賀之時
政所被永享度截人權右少辨嗣光也今度
計申也若可為截人左少辨兼光欽之由伺申之處
先雖不忘可被相宣仰之由被仰下之二月

廿六日四月十四日重伺申候處追可相仰
云々六月十一日可為益光之由被仰下之
則於御所面示之了一武家奉行人事四月
十四日伺申之時攝津掃部頭之親飯尾下
總守為數也此外猶可相加欽之由可尋攝
津之旨有仰後聞松田丹後守相加之了七
月六日藤中納言永示送云攝津掃部頭之
親四品事今日中可有申沙汰之由有仰者

答畏承候之由則殊奏聞宣下事下知藏人
權右中辨益光了略中奉行家司可沙汰條々
可注給之由益光示之間六月廿七日注遣
之折紙也兼日一參陣上官可相被觸仰事一
兵部省移文當日可持參之由可被仰事一
可儲陽明門代之由可被仰官事一當日尅
限可被相觸事當日一早旦可被奉仕御裝
束事一可相被書進散狀事一可被覽日時散

散狀事一可被進兵部省移文事
按此中
右他
左他
右他

何凡
少何

義政公記云長祿二年七月廿五日康成今
日有任大臣事太政大臣持通内大臣予
右近權大納言藤原公敷元權權中納言藤
原信量元三位參議藤原公躬元藏人頭右
予設饗祿凡大臣大饗近代諸家中絕不行

之而永德元年七月廿三日鹿苑院殿任内
大臣給永享四年七月廿五日普廣院殿任
内大臣給皆被行之任彼例今度所設之也
中於陽明門代乘車經本路歸里第入閑門
也東面公卿以下直入西面欵此後良久尊者
臣右大來臨尊者直昇中門廊南切妻經中門
廊并對代南弘庇履殿西南簀子入當間東
云間也被着橫座西面次予自東多經簀子着

親王座北面次諸卿次第昇中門廊切妻經簀
子入南面一間經座末并後着奧座東上南
將久我大納言九條大納言今出河大納言
三條大納言西園寺大納言中山大納言帥
大納言日野大納言新大納言別當着端座
等也但帥大納言為行事即起座
之人各入當間自座後着之東上北面山科
納言新中納言中納言中將源宰相次并少
中將左大弁宰相公躬朝臣等也
納言同昇切妻着西庇座南上東面今日出
朝臣少納言宗賢朝臣左中弁益光朝臣少
納言顯長朝臣長清朝臣吾中弁宣胤左少

弁俊顯右少次外記史同昇切妻着對代座
弁顯任等也
東上對座大外記中原師藤朝臣少外記清
原忠種中魚康顯權少外記中魚康純清魚
賢親以上着北左大史小規晨照宿祿次五
長與宿祿左少史高橋俊職以上着南
位家司主水三業隆并下家司主計允中原
盛富紀季廣同益廣中魚盛重芽着酒部所
床子今日雖降雨不及移酒部帷立次前左
京大夫相豐朝臣取簣薦二枚參進並敷尊
者前即留候勤陪膳俊宣魚益昇机一脚立

簣薦上次又庸宣久任昇今一脚相並立之
則居肴物役送同前陪膳取之居机諸卿机
魚立之居肴物永德永享例云々
親長卿記云文明十八年正月十六日自右
中弁改資朝臣許送使者民部大来七月御
拜賀頭弁供奉并申次床子座芽事可存知
東山殿為御例云改資朝臣為室七月廿
三日室町殿御拜賀今日延引河為来廿六

大将御并賀也兼日次廿三日延引廿六日又延引今日治定畢家司

右中并政資朝臣觸之今朝又西下尅許為

送使申次御前召可存知云々

己尅之由兼御門出云々扈從公卿略中殿上

日相觸之人元長朝臣中并左時顯朝臣西洞院右資氏

王伯通世朝臣中將院光忠朝臣葉室右大弁

俊名朝臣會參家幸清閑寺右少辨參賢房萬

小路參會今日申和長東坊城參會餘十人

侍中并賀云々略之○按少名八是百

拾芥記云文龜二年七月十二日武家御參

内有御昇進御四品并宰相中將雖可為陣

義依無要脚消息宣下也今日午刻持參位

記於室町殿入室町殿東面妻戸相跪渡位

記不入葛蓋於家司侍從家司自南面妻戸御

簾下渡之女中女中取之持參被覽位記納

砂金裹於蓋如元自簾下被出之家司渡之

予取之出妻戸右廻退出

家司の役と初

又云永正十八年七月六日皇町殿御見自
播州為浦上調法御上洛也細川右馬頭以
下參御迎廿八日御叙爵後五位下御名字義管
大納言和長勳進分也今日午刻大内記為
康參陣自是直持參御位記宿紙如例入葛
蓋路次柴輿入位記蓋於輿中下輿之時令
持雜色參進之時副使兵衛尉行為自雜色
手取位記葛蓋授大内記大内記渡家司藤兵

衛督永家司渡之於簾中女衆女衆取之被

參御前欵按以十二條の字町殿乃時らぬれ
友人之心補き以て

宗五大双紙之人の被友之人乃傍坐の方へ

書状とせし時又幸つて中七のんきんに

とてあはれしにありて競ひのたは被るる

諸云とてへ一宛元不き家司打名なる家司

の人をとてしとてくくの中或る居不或

ゆ及も危形と書へしとて時にも後詳云と書

へーさうと申すに及んぬ

末森記云能登越中境目荒山下云所ヲ取

出ニコシラへ能登七尾ノ才サへトシテ

袋井隼人は神保安藝守家司也神保方

ヨリ此城ヲ取立ニヨツテ也 按ことニ條の私

を中をりしりたか
まうこの家の事とすべし

按家司とて古代職事の之位以てなり

祇候も亦家司以下書吏以上は者として

家令職官令ふより一位多家令一人技一人従四

二人書吏二人二位の家令一人書吏二人西之位の家令一

人書吏二人従三位家令一人書吏一人 中世以後職事は之位以

上とすとも大臣小位より家司

とすとも 但毎家の雑掌と

家司と辨きとす 大臣家司多し家令の

上に別當とて加えて家司とす切之

うひとすとも 松平將軍大將小位

一後大臣家の例も准一別當令ある

取事一筆を並川流記と毎きしつて
うりていこまざるを取司と称せり又別當
今を帯せぬ許字元引自元流本同流本の
西家人も皆と事代を切さるるよこれ亦
取司と稱きし一は利殿の所も流舎のてく
許字元引自元 西家人もともまきしつてこれを
取司と稱きし一は麻苑院殿の流よりまき
稱いし後まきしつてうりて大流と称す

何れかこれ許字元の内を流とつてまきし
者代取司後とくしつて一ふまきしつて
許字元の
内山と大流
けいの取事とつてまきしつて一は本又よんえつてまきしつて
まきしつて許字元とせしよまきしつて一は
まきをしつて一は麻苑院殿の取事をまきしつて
まきしつて一は取の式と改換をまきしつて一は
取の後拾取大流取の例にまきしつて一は
取入とまきしつて一は取司と補とまきしつて一は
取事付方とまきしつて一は取と許字元と引自の取事をまきしつて

常にか如司と云ふ事は中えたる事なり
菅原院殿意匠院殿何事と例と違ふなり
世に乃將軍悉くある人の心を中如司に
補さるるにや一えより心持を成れの後務を
授けたるものなりと云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
なりと云ふ事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

下家司

相國寺供養記云明德三年八月廿八日丁

丑今日萬年山相國承天禪寺供養也中略有

衆僧御布施事奉行飯尾美濃守中澤次郎

左衛門等調之渡下家司為景納長櫃昇被

准御齋會之間職事皆取御布施

薩戒部類私要抄云右馬權頭康任為室町殿職事

實前關義持前内大臣殿一仰送消息云來月九日

為寶幢寺供養大臣可有御出為前駐可令

參仕給之由被仰下候也恐惶謹言後正月

八日謹上中山中將殿右馬權頭康任來月

九日為寶幢寺供養可為御出供奉事奉了

存知候也謹言後正月八日左中將定親於

公卿者家司藏人權辨宣光相觸之按此水象

之空町殿職事とあり
之下孔司乃こことあり

普廣院殿大將拜賀雜事云一奉行人等事

家司丞相御拜賀之時被補之雖然今度為

丞相御拜任已前云職事同所司同一御所

康曆佳例不及沙汰職事同所司同一御所

侍康曆度著淨衣二
一人祇候今度一人
一政所一下家司一下
召使康曆度十人也應永度
二人也今度四人也
一廳召使人數
也今度召置一人召遣嗣
光者也○抄別卷之末

薩戒記云永享十一年八幡御參詣條々三

月四日要脚事如先々可仰播磨守欵之由

伺申之有御許諾但被仰御參詣未定之趣

云々五日召下家司盛繼仰御社參可為來

廿一日任例可催沙汰之由了六日番頭出

納來申御社參事自下家司方相觸之可致

用意之由十二日御社參下行物注文今日

可遣之由示赤松播磨守滿政於御所參了

件折紙云八幡御參詣惣用之内御輿修理

料五百疋諸大夫二人御訪三千疋各千五

下家司御訪三百疋番頭六人御訪千八百

疋各三退紅仕丁裝束料三百疋廳召使御

訪百疋以上六千疋右要脚事可有下知候

也恐々謹言三月十二日赤松播磨守殿
親如先了加以下家司盛繼遣播磨守許了
十三日刑部卿有重朝臣來云只今於路次
所參會赤松播磨守也自廿一日御參籠北
野廿七日可有八幡御社參由被仰下此今
内々可申之由所示也者答悦承之由了御
社參下行物六千疋事取播磨守伊勢守等
折紙付正實坊之處無要脚之由返答可如
何哉之由下家司盛繼來申以此告示播磨
守可返折紙之由仰含即歸來云返進折紙
了何樣可談合伊勢守之由所答也者十四
日於御所有重朝臣云依召所參入也來廿
七日相當北野御參籠御滿參日而為減日
何不申子細哉向後不申如此之事者可有
御責勘隨而廿四日廿日兩日之間八幡御
參社可為何樣哉可注申由被仰下之北野

御參籠日廿四日戊申八幡御社參廿四日
卅日甲寅注進之者御社參日兩日之間未
定云々廿日御社參方六万疋之内且三千
疋自御倉請取之支配下行之由盛繼所申
也廿八日御社參摠用錢今日悉下行之由
翌日盛繼所申也廿九日召盛繼明日御出
事寅刻可催具之由仰之了卅日卯刻自北
野御還向還御室所殿辰半刻御出
按内記并
山古納云々

親乃日
記云々

又云嘉吉三年六月十五日己亥今日奉為
普廣院贈太相國第三回御法事來廿四日
相當御云
日於醍醐三寶院被行曼陀羅供阿闍梨前
大僧正義賢職衆廿口交名執蓋民部大輔
在左
匡祐執綱前大膳權大夫匡重朝臣兵部權
大輔相豐朝臣己上兩
人四位堂童子匡祐丹後守
宗經己上皆
束帶等予仰下家司盛繼催進之了

網所并家司已下不及參向依阿闍梨命也
去年已來如此也一事以上如去年周忌御
法事廿日甲辰自今日於等持寺被始行御
八講來廿四日相當普廣院殿第三回御正
日以件日被當結願日後年每年可為此定
也予申沙汰之公卿并御布施取殿上人以
消息催之頭右中辨資任朝臣每日參入行
事於堂童子等者仰下家司盛繼令催之僧

衆仰網所如先々早旦書散狀遣頭右中辨
資任朝臣許早參可申沙汰之由示之
建内記云文安四年正月五日戊辰叙位議
也云々叙人小折紙冬房寫送之在左中從
五位下中原盛繼舊院廳官也室町殿下家
司也号伊勢左衛門尉也
故為景入道次男也兄盛
尚逝之後為相續者也
慈照院殿大將并賀篇目云御訪事一地
前駈一御隨身一權御隨身一番頭一牛童

一副御牛飼一金殿持雨皮一御雜色一下家
司一一負一居飼御厩人
親長卿記云長享二年四月六日藤中納言
入道來可張行明日御會事人々尋之申治
定之由又勸修寺大納言申松明事主殿大
夫并下家司等申付候處主殿大夫申非禁
裡御儀進上事無例候間不可叶云々下家
司院無御座候時被付進室町殿之間難進

之由申候云々

梅下家司之御座司の下司より海倉乃
此は海倉の案を新事とす所のその
職告あま海倉令に正し家司の職小しとて
あつと知事事ハ境の職は相當せむ
うま令の下司より推す云々
下家司と稱す
あつと知事事ハ境の職は相當せむ
うま令の下司より推す云々
下家司と稱す
あつと知事事ハ境の職は相當せむ
うま令の下司より推す云々
下家司と稱す

に口方と等先とれにある知乳事ハ即中

中司（司）ハ知乳事ハ即中
知乳事ハ即中
知乳事ハ即中

職とらへて後くる事ハ引付先ヨのふらま

さる物にさおのつうと乳業のさ界取ま

又及不可た所のあまあ人の中たも引付先

ふさる族あといさともれささる中司

うのさるれと何進もあ何さ青（祿）のさるれと

今さる事言ささるれは知乳事ハ即中

はふさ口首の職号も設あられれ殊も中司

つ入祿得ささる事はささる人ささる如くあさるれ

あれとささるささる中司とつ入若ささるささる

致もあ除ふとつ入ささる麻菰院殿の何さ

中司の及人と中司に補せささるささるささる

ささる中司をささる何にささるささる

官人の何にさ侍れ彼よ何ささる者ともて

中司よささるささる

はさ後め者さる後
め位よ進むささる

ある部(其事)等の如く家務と稱する者あり
さういふ人候とせしむ。河内及び阿波にありし
歳考といふ概十郎といふは一控部係と照校
しむ。五下といふ大辨をさしむ。二見たり。

家務

徳倉大草次郎之寶徳元年十一月晦日所出朱
印箱あり。一紙書に慶長以後ありしとあり。成申と
り。新あり九の上。右京弁憲忠と号たり。山内と

憲忠者、軍より長尾左衛門尉京中宿衛奉長、代々
執りしに扇谷の流理を又持留あり。是より世り申
大炊の忠。御より此の御家一より及ぶる。所し。是
澤中少弼、取成あり。家務と稱す。一憲忠と稱し。一
武列河内之原。所々あり。一信忠と稱す。一信房
とも。年、のり。代々。武列。信忠の代。河内中。武列。信
政。務。も。治。り。し。信。忠。の。子。と。り。新。い。り。と。り。

河内河原の徳書(以て證し) 一
扇谷の徳書(以て證し) 一
扇谷の徳書(以て證し) 一

徳書(以て證し) 一
扇谷の徳書(以て證し) 一
扇谷の徳書(以て證し) 一

在柄社所藏長尾系信贈右田道灌状云今

更於比身上可被與新儀比之既何事比之

恐^愁景信相^當當方家務職比之在於當^當家滅亡

後者不顧一才款存比之既何侍業比之上可

執中比 按當方之身山内上格を
一ノ系信ハ系仲ノ子ナリ

又右田道灌贈寺尾右棟入及状云折出家務職

事右系比社作分比比先比目分分比於今度比

彼中比比不^可有^余後比皆自比比比中來比比比

當^當比^事比^景春^之比^被作^出比^後自^無厥^後

比^有合^比比^事比^一比^相比^比便^不能^比

比^膝下^祇候^比比^於雜^況比^不比^之比^是期^比 按此
事之比之武能也後代の事なり武能ハ
上段の如く後めぬなり景信の嫡子なり

於^蔭私^法比^景信^地界^以後^系春^取比^省也^比

條^不比^威父^祖右^信於^山内^右務^比比^事寺^尾合^比

比^如仍^候比^相後^長尾^氏比^比比^成因^茲比^系春

比^述懷^於武^相上^比中^比比^系春^因送^御交^比者^其對

長尾の合戦に憤者二万余は由は此傳記を毎
^あ 所々いふと
板の裏にあり

徳倉大草紙云久保の年十一月廿日日上杉府谷の
大杉修理長政も打死あり人つゝ子あり
つゝつゝ此の老長政傳言し中故持の乃と
男官政を修理長政とふ任し府谷の長政とみたり
府谷の長政といふは此の乃と道灌の内れや長政
長尾の乃と^{書信}乃と道灌をのる長尾長政の忠義を顯

示すつと神中付爰小長尾にありあり耐京事い
長尾つと此の大名より有勢の者也此の老父と
京菴忠切異他能る京春の走つて此の長政の
つと長政に忠義をなす此の長政の忠義を
道に忠義をいふしと此の忠義をいふに
徳倉の乃と乃と道灌の事と相伝た道
灌は此の乃と一たつても長政といふはありと
此の乃と乃とつと京春の事とよむと此の乃と

はる伊家移方職に及ゆは也。又とる龜右切と
言ひて武家の代に社奉行と忠家と如
化大系と執事何意かといふ事

按移方といふは此の執事といふて執事と稱
めらるるものなり。於て社乃長友と社務といひ
一寺の長者と寺務といふこと。年久し
くると於長尾左田の二氏身もあ上移りぬ
執事といふ凡そ家の執事といふ事也

左記事と稱するもの各ある事あり。因に長尾

大石扇谷家など左田上田といふ事あり申にも
長尾左田といふ上首といふ執事の職を世に
しと稱すといふ一家の事を呼ぶて移方と稱す
俗に或と稱す。執事といふものあり。執事
及執事條。殊小室佐治の二氏何事し。成格
といふ事あり。陪后といふ事あり。山守といふ事あり
まゝといふ事あり。湯倉の事あり。山守

武家名目抄第九冊^{十二}

あはれ家令長清氏改事と恣よせしに似
ゆるくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

武家名目抄第九冊
あはれ家令長清氏改事と恣よせしに似
ゆるくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

宿老

家老

家老脇又稱年寄脇

武家名目抄第十冊

職名部六中

宿老

吾妻鏡云元暦元年六月十六日癸酉武衛

出于西侍給忠賴依呂參入候畢對座宿老

御家人數輩列座有献盃之儀工藤一藺祐

經取鉤子進御前是魚被定于其討手訖云

云云

又云文治二年十二月一日甲戌千葉介常
胤自下總國參上今日獻盃酒二品出御西
侍上常胤朝政善信義實遠元盛長已下宿
老多以候其座繹及數巡三年九月九日丁
未比企尼家南庭白菊開敷於外未有此事
仍今日迎重陽二品并御臺所渡御彼所義
澄遠元以下宿老類候御共御酒宴及終日

后刺獻御贈物

又云建曆二年八月十八日辛卯伊賀前司
朝光和田左衛門尉義盛可候北面三間所
之由今日武州泰時被傳仰彼所者撰近習壯士
等令結番祓候云々而件兩人雖為宿老為
被聞召古物語所被加之也
又云貞永元年十一月廿八日武州為御當
番今夜宿侍于御所給而御共侍持參御筵
不可布御疊之上昵近執之者爭不辨此程

之禮哉尤恥傷輩推察之由被仰出羽前司行義
民部大夫入道行盛以下宿老兩三輩候其所承
之周防前司親實此事可為末代美談之由
潛感申之按本羽民部ハ行盛

又云仁治二年三月廿三日壬子將軍家渡
御馬場殿前武州泰時被參遠江前司駿河守宮
内少輔攝津前司師員上總權介出羽前司以下
數輩參上先分若輩等射遠笠懸次於弓場

相加宿老之類有射的之儀中的射手一番
若狹前司泰村氏家太郎二番下河邊左衛門尉
駿河四郎左衛門尉三番小山五郎左衛門
尉上野五郎左衛門尉四番伊東大和次郎一
橫溝六郎五番小笠原六郎加治八郎左衛
門尉六番佐々木壹岐前司葛西六郎按若狹
祿元元
又云建長六年十二月十二日庚辰於御所

有評定其後相州依召參御前給魚被儲酒
肴御一門若輩并佐渡前司基綱和泉前司
行方前太宰少貳為佐以下宿老多以候座
被召出魚鳥等於其砌令壯士等庖丁之相
州殊入興按基綱行方為佐
尊氏
梅松論云津每尊氏執事所並國系系御
供事其宿老西出津津津津津津津津津津
津津津津津津津津津津津津津津津津津津

之由同善云堂上初座を一方に召出され
一方より三職は清元を召出され外の本
方宿老等の候より召出され中津津津津
お侍より召出されの内宿老と別のと申す
挨拶より召出されり申す
大館常興記云天文十一年二月三日為出使挨拶
来條南津津津津津津津津津津津津津津津
之也仍事の宿老を召出されり申す

御方之入事行御方 百々々々々々也 御方之入事行御方

御方之入事行御方 百々々々々々也 御方之入事行御方

鎮倉年中行事云正月五日ノ夜御行始管

領へ御出恒例也畧中三獻メノ進上ハ御劔

一振管領之執事之子又ハ兄弟面道マテ

持テマカリ出管領之舍弟親類等受取テ

持參進上アル也其後御盃白糸是モ被官

中之宿老西人メ持テ出ルヲモテノ御祝

過テ公^方様別之御出則管領被參其

時役人并宿老中御座へ被召御參者ニテ

御酒三献參御三献メニ又御劔一御小袖

十重進上御馬一疋參其後御盃參管領評

定奉行以下宿老御座へ被召御臺ヲハ手

長面道マテ持テ參御膳以下ハ奉公中持

參御中ノ御酒之御盃雖有式題宿老中堅

依被申管領給アル也 按却又ハ被參中ノ

宿老とあるハ後修家

尚老あり若老中堅信被申
とありハ亦若代若老あり

又云八月朔日八朔御祝下号御連枝様方
護持管領奉公外様當參之人ハ不及申在
國之方ハニモ皆ハ御頼進上中早旦ニ宿
老中ハ近臣為御使急々有出仕テ御劔可
被申替旨被仰出入間則皆以被參唐物ハ
中老被替宿老中老申繼於殿中御食ヲ被
給御返御劔唐物等申繼ニ持テマカリ出

代官ハニ請取セテ後大御所様進上御

返モ皆代官給テ其後代官各宿所ハ罷歸

按以ニ條の若老ハ鎌倉公方家の評定凡
と云ふ中老とありハ引付凡乃こころ

太閤記云 考台初ノ普 或時法別ノ殿部一坪

百有汁尚ありハ 考台初ノ普

一ノ中名被仰付ハ 考台初ノ普

一ノ中名被仰付ハ 考台初ノ普

一ノ中名被仰付ハ 考台初ノ普

及之其く為某より侍奉せし出来りや

少汽とてかりし。け。とて名りし約也

世々得し一匹のりん中りし事ハ世々也

較之其徳計ひ之と名付しり。 掲げし條
古蔵の事

名岩光

又云 高麗傳 某ハ新羅百濟高麗を統一して

海彼國と退治し。今入唐功者

其ハ高麗と云く。夫由く徳風と云ん也。

才く。吾物と改替て改めし人。と云ふ事。古事

三人。一。高麗。二。高麗。三。高麗。 高麗

三人。一。高麗。二。高麗。三。高麗。 高麗

五人。一。高麗。二。高麗。三。高麗。四。高麗。五。高麗。 高麗

等。一。高麗。二。高麗。三。高麗。四。高麗。五。高麗。 高麗

高麗。一。高麗。二。高麗。三。高麗。四。高麗。五。高麗。 高麗

金言和款集云。後卯月廿四日。此のけのり

友人。高麗。一。高麗。二。高麗。三。高麗。四。高麗。五。高麗。 高麗

いに如賀高母下ろの如くあつらひに教ふ
あつらひにきりきりてはるる

久永口年細川高國より河成記云迂國
長大司能形神代古漢代年芳元勅
中一乃西能形神代宿元元西野在てた子細
ハ長御ニ由宗後寺更神代出成水中時迂
國少長の秋に寄候事此後宿元元宿元元
宗元典願四家ハ石浪も宿元一家代

乃以判子流為河成山殿と申す迂國年
古長右了勅申申同に申す候事如何
有自宗の河一家に宿元元勅に在り
上二條ハ爰に
家元宿元形

鎌倉年中行事云奉公中山内扇谷宿老中
二内ニテ寄合時ハ右ノ膝ヲ立テ盃ソ
トイタキ可吞一奉公中山内扇谷一家
中へ謹上如此恐に謹言謹上ノ下ニ直ニ

名字官途ヲ書也一長尾大石太田上田彼
家所へハ内封テ^{此ハ海ニ}謹言如此^{此ハ長尾大}
宿元右田上田ハ^{此ハ宿元右田}宿元右田ハ^{此ハ宿元右田}
と^{此ハ宿元右田}宿元右田ハ^{此ハ宿元右田}
一^{此ハ宿元右田}宿元右田ハ^{此ハ宿元右田}
宿元右田ハ^{此ハ宿元右田}

又云奉公中之宿老木戸野田
長尾大石^{此ハ長尾大石}
宿元右田^{此ハ宿元右田}

小條早雲^{此ハ小條早雲}
宿元右田^{此ハ宿元右田}

宿元右田^{此ハ宿元右田}

本^{此ハ本}

少^{此ハ少}

時^{此ハ時}

見^{此ハ見}

銅^{此ハ銅}

定^{此ハ定}

松^{此ハ松}

誓如^一南^二寺^三中^四麻^五田^六為^七新^八由^九為^{一〇}勝^{一一}軍^{一二}地
 為^一立^二所^三氣^四信^五不^六為^七方^八格^九又^{一〇}是^{一一}論^{一二}富^{一三}橋^{一四}如
 一^一亦^二有^三言^四法^五移^六計^七也^八長^九尾^{一〇}為^{一一}一^{一二}事^{一三}之^{一四}原^{一五}也^{一六}
 一^一い^二く^三こ^四下^五勝^六事^七決^八定^九才^{一〇}中^{一一}軍^{一二}之^{一三}門^{一四}出^{一五}大^{一六}岳^{一七}分
 一^一里^二傳^三橫^四池^五後^六以^七初^八取^九二^{一〇}下^{一一}徳^{一二}を^{一三}り^{一四}と^{一五}紅^{一六}急^{一七}度^{一八}中^{一九}並
 一^一居^二宿^三光^四中^五光^六皆^七々^八是^九者^{一〇}物^{一一}也^{一二}本^{一三}之^{一四}初^{一五}極^{一六}以
 一^一為^二流^三小^四松^五法^六之^七文^八是^九所^{一〇}下^{一一}其^{一二}本^{一三}之^{一四}初^{一五}者^{一六}陣^{一七}一^{一八}
 一^一各^二是^三弟^四と^五忍^六也^七と

瓦林正頼記云魚日三頼舎弟吹田又五郎
 瓦林四郎次郎與カニ齋藤新五郎富松彦
 三郎稻津小五郎鈴木與次郎ヲ初トシテ
 其外可照侍數十人堅メケル中ニ別シテ
 此廿二人申合神水ヲ飲同心ニ合戦スヘ
 一^一契^二約^三ヲ^四ソ^五結^六ケ^七ル^八彼^九與^{一〇}ノ^{一一}中^{一二}ノ^{一三}證^{一四}人^{一五}ニ^{一六}宿
 一^一老^二一^三人^四入^五テ^六可^七然^八ト^九テ^{一〇}麻^{一一}田^{一二}入^{一三}道^{一四}宗^{一五}圓^{一六}ヲ^{一七}ソ
 一^一被^二入^三ケ^四ル

被入ケル

伊達成實記云大内俗前我等所へ被申候
心不慮ノ儀ヲ以政宗公ノ御意ヲソムキ
如此ノ躰ニ罷成候小濱ヲ罷除候時久會
津宿老松本圖書助跡絶候間此知行ヲ被
下候様ニ申會津ノ宿老ニ可仕候由會津
宿老共申候間罷除候処ニ扶持方ヲサハ
不被下及餓死躰ニ候間政宗公御下へ伺
公申度候少々御知行ヲモ被下被臣仕候
様ニ夕ノ申由申サレハ
又云伊達上野足輕ヲ少出ニ端合戰候東
ノ方ニ又取出ノ普請ヲ被成定番ニ片平
助右衛門ヲ被差置候其上會津四人ノ宿
老衆日替ノ番手ニ居被申候
蘆名家記云蘆名家滅抑此松本太郎力逆
亡盜觴條
心ヲ公ル事ハ盛隆ニ恨ル事有テ不得止
也其故如何トナレハ會津蘆名代々四天

ノ宿老トテ平田松本佐瀨富田四人ノ衆
奉行トシテ會津ノ仕置ヲ代々執行然處
ニ太郎カ親松本源兵衛尉ハ太郎三歳ノ
年ニ病死ス然リトハ一ニ共盛氏公ヨリ
親ノ家習ヲ相違ナク賜テ七歳ノ年盛氏
ハ御目見ヲトケ四天ノ宿老ノ中ニ任セ
ラル然ルニ盛氏御逝去ノ後盛隆代ヲ取
玉ヒテ仰コトニハ松本太郎ハ若輩ノ者
ヲ宿老ノ中ニハ心得カクシトテ奉行ノ
内ヲハツシ玉ヒ其上松本カ上屋敷ハ三
ノ丸ニ有シヲ屋敷ヲモ取上ケ米代ノ西
ノ方ニテ少ノ所ヲ上屋敷ニ被下
藤葉榮衰記云 岩瀨郡御 去程ニ為氏公御
臺ノ御事思沈マセ給テ御歎ノ余リ御機
色不穩御出馬ノ御心掛モ十久御前ノ御
事ノミ思食ス然ハ御一門四天ノ宿老伊

巨相模駿河信濃御知音ノ大名衆ヨリ加
勢ヲ貫ヒ給ヘハ無程馳來千余騎ニ成玉

別所長治記云天正六年寅三月四日為西

國成敗都ヲ立同月七日播州加須屋力館

ヲ為本陣行列ノ次第一番旗二鑊炮三弓

四長柄鎧五切具足各二行ニ列テ前後騎

馬相隨之次兵鼓次軍監次乘替馬次秀吉

手廻ノ兵具如先次螺次小符次手明ノ歩

卒大將秀吉先鑊炮弓鎗甲立後小旗次宿

老次使役人廿八次斥候ノ役人廿六次惣勢

七千五百騎引下リ家老一頭行列如前入

國美ノ數粧其比希代人見物ナリ

大園記云熊本ノ城作依者老多小向々

救度ノ勝利ハ如法也其所以平一觀と目

前に立しられんをうるに依るに似し世代訓ハ

ゆふまゝしつ切くお一合銭とんとあふん
や何れも魚と海へけしは若かり欲返教
わとあまゝゝんふんふまら女を遊ん
り自然物ゝも村派失ひあつたあれハ
得大利一軍に執統及ゝゝ勇助統一隊
まゝやと押やゝ海の中へ高きさゝ
梅宿老々若老とさ小田ゝ宿徳老切代
人ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ所職代

梅ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ宿舎屋の神主と
くゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝと海に付代あれ代
是のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ老練代事とゝゝゝ
れゝ補せゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ宿徳老とゝゝゝ被代
のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝと利
とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ足利
家も耳なりては神の種ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
りあゝ年次物ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ令々評定代

モ可散申トテ便互ノ大名ヲ憑マレケル
処ニ結城氏朝無貳奉被憑子息七郎光久
御近ニ被參ケル其後氏朝家老一門ヲ召
集メ此條如何ト評定ス家老トモハ未被
申御請ト思ヒケレハ水谷伊勢守築修理
亮同將監黒田民部丞一同ニ申ケルハ當
家ハ及累代差ル名家ニアラサレトモ代
代与義士一日モ未取不忠之名能ク可有
御思案ト申モ終ラス氏朝ノ一男結城七
郎御供申ニ若君御入有ケレハ家老一門
大ニ驚ケ備ハ是程ノ一大事ヲ吾クニ被
仰合^遠迄ニモ不及思召立吏人ニヲハ層共
思召サリケルソヤ今度ノ御大事ニ逢テ
無^レ詮トテ水谷以下四人ノ家老共髻切テ
一同ニ遁世者トソナリニケル

龜倉大弐紙云嘉慶元年五月十三日古河

住人小田たけふゆ因一人搦^進すは男白村より

右小田濃政入及父子小山が犬丸同主は世心あり

くが犬丸濃政の中より六月十九日小田より子之内

右預七月十九日上杉源朝大將より高橋の小田

城より及小田并子息之家光信大某七田氏

高く男脚心は搦^進すは又杉原信三源朝の

又云享徳三年十二月廿七日杉原氏来鎌倉より河内國

押寄より村を治るが憲忠王後古之切高杉防

我きことりかありて一人も不辨討死し憲

忠代首をハ結成成就人今子祥永同身祥賀

討死く河内國系実授し徳くも信憲忠の官

能事ハ庶たしとくもいふとくも庶民布衣

に祥永兄もいふとくもいふとくも庶民布衣

多美右より多美ともしれ高橋國より高橋

多美より子孫結城氏より高橋より高橋

の対高橋長知より高橋より高橋より高橋

洋記より家ハ此時此例也

應仁記云武衛家文三元年ノ夏四月ニ武

衛ノ義敏ト義廉ト家督ノ諱ト出来テ騷

動ス其故ハ武衛惣領千代徳丸長祿三年

卯月早世セラレシカハ家督相續ノ息男

ナクシテ大野修理大夫持種一男義敏ヲ

執立任右兵衛佐家督ヲ相續ス然レ氏無

程家老共ト不知ニナリ甲斐朝倉織田ノ

三人共ニ新座ノ主ノ普代ノ家長ニ對シ

加様ニ我々有ヘキ事ナラス是ニテハ

武衛ノ家督三職ノ座ニ居ヘカラスト評

定シテ伊勢守貞親ニ頼テ訴フ

織田家譜云及于足利氏之領天下而斯波

氏号武衛為越前國主見織田神職之兎容貌

端正而召之為小臣以織田為称号乃自越

前移尾張斯波氏有六家老其一人有罪而

被放流也以織田氏代之自是其氏族繁榮
以至信長按文正記尾州之役代織田之臣由敏廣
法政の事後よりあり織田氏に就きて尾州の務を多しと
久しといふあり亦光弘共の事務を擔し又光弘の
と神の力のものと見えたり且この法書及下より
大友記よりいふ移降の事見えたり大友記の事あり

上杉定正贈曾我豊後守状云畠山方隆諸
士多非保我亦有威降造次頼清其味來
扇我亦國成敵既越亦有補佐家光近成
敵亦僅三百余軍日卒の馳下將降下是也

廿五年彼國守後より心掛五卷支流也亦
友如智多預國者事此及抑胡良を多し
者其批判に由り吳由相胡古に我由に法政
不知事多し而約は此に權を任者く由此之
之匹更隆勿論は古余手なく合我に此此
と合我に會中より片叶外由り約に是月
一二首免其言と公然預國の能由方一二
家光成其未踏我場二夜とありしなり

尺菅急見一し不謀之使し世法に新洞曆元
不勘合見地利台志と名知後百里五里三里
曰及く日月と經長と事多可老取國んん
うに實了下乞多とわ一節

河城記云河城は越氏経再興一今古記
と以し平ねは城二と述朝定先祖代多光太
田の原志と之系そ始と城と行しぬ

東乱記云可諄討上杉ノ家老長尾六郎為

景逆心ヲ起シ越後ノ守護人上杉民部大
輔房能ヲ打殺シ越州ヲ兼取シカハ管領
顯定入道當屋形憲房ヲ相伴ヒ上州ヨリ
越州へ押寄永正六年七月廿八日長尾六
郎ヲ責給へハ為景軍ニ打負テ越中ノ西
濱へ落行ケル明ル永正七年六月十二日
越後ノ一揆共高梨攝守ヲ大将トシテ為
景ニカタハラハレテ悉ク蜂起シケレハ云

同六月廿日顯定入道長森原へ出合長尾六郎ヲ追立ケル所ニ高梨攝津守馳来テ顯定ヲ討取申シケル

又云權現山合戦條憲房使者ヲ以京都へウツタヘ申シ六郎ヲ可誅由サレエ申ス其状ニ

云中略將亦長尾六郎非下我民部大輔房能耳重而可諄身解如此之條為家郎亡兩代之

主人候事天下無比類題目候歎云此又云上杉條曾我兵庫助進出テ申ケルハ

越後ノ長尾景虎ハ長尾六郎為景カ子ニシテ上杉本普代ノ家老ナレ氏父為景故

管領ヲ討申テヨリ御敵トナリケレトモ為景死去ノ上公別儀ヲ以テ蒙御免大將ノ号ヲ被下ハ定テ忠戦ヲ致シカ

快元僧都記云小弓上様義先年御父政氏様御勘當奥州御下向有之其後上總國住人武田真里谷三河守入道卜同小弓城主

原二郎及鉾楯每度小弓打勝畢目茲武田
自力不叶自奥州義明奉招請為大將小弓
城攻落原次郎并家郎高城越前守父子滅
亡北國府其合我軍派兵討之父子皆死
南行到若王寺前南行到南禪寺時御下馬

光源院殿御元服記云天文十五年十二月
十八日公方家御成也御成道路從淨土寺

南行到若王寺前南行到南禪寺時御下馬

看之中從妙顯寺前過堅有之其人數目賀

多楯崎三上三雲蒲生等皆是定賴家老也

定賴父子御門外伺公即參向御盃頂戴三

盃賜之

大友記云天文廿年辛亥九月朔日二義隆

公父子共二御腹メ廿儿既大内家退轉之

ケレハ大内殿家老陶尾張守隆房義鎮公

御舍弟八郎御曹司ヲ申請奉リ義隆公御

跡目ニ仕リスエマイラセ度由田原近江
守ヲ頼セヨト申上ル

室町殿日記云 泉州伊豫守大 義輝之評説

御感懐の事りれく至る松礼の方(西感懐)と云

下りか

去十二日泉州より主殿助の要る(多勢)に

し方(此)を方為後浩んせむい伊豫守并浩の

光る外数輩の打死し候毎度名を名とハハ

る(此)に叙の事(此)に(此)に(此)に(此)に

也永徳年十月十日松水洋安所友御判

又云 丹州波 丹波任人(波)を(波)を(波)を(波)を

のり(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に

の(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に

老(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に

ふ(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に

裁許奉(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に(此)に

旭累年在氣中一むとくとも後と不_レ違_レ紀_二明
然_レより始_レり一_レの_レ所_レを_レお_レ國_レも_レ家_レ光_レ其
電_レ産_レ者_レ向_レを_レ産_レ記_レき_レる_レの_レら_レく_レく_レ大_レ中_レは_レ是
此_レ宗_レ勝_レ余_レ後_レ言_レ母_レ名_レ言_レ可_レい_レも_レ少_レの_レ如_レる_レは
為_レす_レ以_レ一_レ札_レ中_レ入_レり_レ之_レ推_レ察_レき_レ十_レ月_レ十_レ日_レ由_レ後
備_レ前_レも_レ後_レ義_レ長_レ好_三

言_レ義_レ乃_レ力_レ云_レ言_レ事_レり_レ飛_レり_レま_レを_レ祖_レ父_レ名_レ事_レり_レま_レを
れ_レも_レて_レて_レ然_レの_レい_レと_レい_レ阿_レり_レ祖_レ父_レも_レ到_レ出_レ也_レお
す_レる_レ祖_レ父_レ名_レ事_レり_レま_レを_レ家_レの_レ古_レ例_レに_レ家_レ光_レは_レ方
一_レま_レ一_レ家_レ名_レ事_レり_レま_レを_レ又_レま_レを_レり_レま_レを_レい_レま_レを_レ

大_レ國_レ記_レ云_レの_レ抄_レ後_レ下_レ互_レ見_レ條夫_レ産_レ唐_レ大_レ室_レの_レ臨_レ津_レの_レ錦_レ行_レくと

千_レ代_レ久_レ一_レを_レお_レと_レ家_レの_レ十_レ人_レ代_レ家_レ老_レを_レく_レ百_レの_レ載
判_レげ_レん_レく_レ左_レ然_レく_レま_レを_レけ_レ人_レ代_レ深_レひ_レ出_レる_レ事_レを_レ
公_レ氏_レく_レく_レ一_レ言_レも_レと_レれ_レん_レや_レ一_レ家_レ光_レ儀_レは_レ順_レ地
別_レく_レ定_レ位_レを_レく_レ少_レ儀_レく_レ五_レ時_レ名_レ路_レを_レぬ

甲_レ陽_レ軍_レ經_レ云_レ
行_レ玄_レ代_レ也_レ人_レ抄_レ條清_レ遠_レ代_レ家_レ老_レ凡_レく_レ陽_レ矣

流も百舟内後修理三百五十騎山縣三所是處
二百騎之故源正且百嘉務小山田沙三所二百騎
其利は馬の忠百騎要名は馬百騎今福澤閑
七十騎と名若夫の忠百騎枯山傳者も舟務原
年人伝舟騎小山田備中も七十騎為津赤物
三百騎津川舟務駒井太京五十六騎山宮山丹
後辛騎

又云 純子有り 竹うふ太名とくは吳山今上は家
老古以てくくみ人さくハ三人ありてはま
者あり

中は家傳記之家の老古主君代出代仕り
之儀は威揚様江御付もくも少く威揚様
の事中公刻に居成後能少劫人之物能少劫
一五儀の日利と能成行要に事存
又云家族并家老お流者も此理もあらず
天下等も打果と云も片方針も是にあり

成役下りし事

早陽軍艦發揚之由一其家元家老元出取礼惣
しく大元元出取の時必亭主行少取仕むか
りうれを人の事んか一其家元家老の元
なりし後と身数取を元出取と申す事
魚一能くををも分る事

伊達日記云築飯ニ御在馬ノ内青木修理
抱置候三人ノ者儀小濱へ内通ニ付大内
モ人質返ニ候事無念ニ被存候へ共家老
ノ者共ノ子ヲ相捨候事ニ不成候間小瀬
川ト申所へ双方ヨリ罷出御横目申請證
人替仕候

大園記云 秀吉歳書 信長ノ事ニ所及と云

十三歳の比林信長と云ふ事其時年子中務
が梅内藤後助と云ふ父梅後と云ふ事附まつと
一曰人の家老と云ふ所及此の事あり

う巨風不遠へ取取ぬ〜とて彼家老く者其
眉とてしその梅より信長とつ〜と知知
を父傳別なりとや

安土日記云元龜三年霜月下旬武田信玄
遠^別二股之城取卷之由註進候則信長公
御家老之衆佐久間右衛門平手甚左衛門
為大將御人數遠^別瀨松二至之被差遣
板坂市赤廣長記云日中一

〜と人衆老連判〜山状山淺野淳正増田右
衛尉石田治納少将津菅院生東大藏右衛門
奉行も連判状家老五人奉行五人此状諸
公へ出せ家老連判〜内隆系判出給
本も五

三河記云酒井物造及之土井とあり
之前より一の家老山〜と上棟物
及〜と後つといふは是の事なり
信本不成

しより夫より物監房の御下りてくはるなり

文祿三年河成記云今及名例し河成増倍

しより一辰馳走下江之由等々家老御付

等々年祿云慶長十八年二月廿七日播磨死

將軍家以前年しよりしより家附仁也家老

の出頭十七年少の遠在成

當代記云慶長十四年七月廿三日此比上総

吟主大御所未家老ノ者皆川山城守本来

關東皆川主上総主養父也山田長門守以下

各以一目安駿河へ言上其故ハ上総主行

跡荒トシテ絶言語夕リ如此儀ヲ數介

條書載則上総主自江戸駿府へ被参上大

御所へ直ニ理ヲ被言上家老衆各被改易

清須分限帳云御家老一万石小笠原和泉

守一万石富永丹波守一万四千石小笠原

監物持組五千石阿部河内御年三千石興津

分右衛門持組 四千石松井石見 四千石松平

攝津四千石眞山大膳 四千石小笠原伊賀持組 千

石小笠原土佐 同上千石高林内膳按はり

尤長とてとく々様をいひていふはこれゆゑに御持とあるかきい

す。者氏様謂なれば物軍家が於てふらゝり

抄紙ありとあり 幕府も高元中尤等の様古

正か一是利屋の時とて始くは檢念あり

秘人二國代と護りし一六の玉のも護りし何

進一族の人の由る處とて長光の事も護代

御とれ境内代改事と執約ありこれと

老の起原とて凡て護り此とも護代とある

家族或はあふれ或はあふれあり

旧小年福とけり老と強りく由儀と御と

おのづかのほろろ家元年号も八幡沼と

三下り 志も渡代也と 又南村に織と帯をさ

ふじも家なるものや一帯帯の部とあつて

よしあつて家元年号も糸きりこと申す

おんあり 中江の部の手と用ひてとあるは

ふじあふ あつてとともと回多氏後方の

ゆき はく室打後の季世と たりて或の

の古格納く麻きりてと大家おのふれく

と家く とておま氏あつて家 といふと家

老と糸 とつてくれ たりてと

あは りか たりてと糸糸

織 名と たりてと織田を長あ家のは

武家の祝式糸沼 と たりてと

格式 と たりてと

りれ と たりてと家元年号の号と糸

あ り たりてと 後世に家光と年号

わ り たりてと の志と

と年 号 たりてと 家光と

と申年辛と申すは又ハハカ中老と申す
てはと申すはと申すはと申すはと申すは
と申すはと申すはと申すはと申すは
と申すはと申すはと申すはと申すは

家老脇 又稱年寄脇

久米田軍記云佐々木ノ家老ハ目賀田次

郎左衛門權崎太郎左衛門尉三上孫三郎

三雲新左衛門蒲生下野守等也略中普代相

傳ノ家来ノ外ニ後藤ト云者アリ近代舟

田合戰以來二代佐々木家ニ盡功忠賞越他

威勢ヲ振ヒ家老ノ列ニナリ頗ニ鷹揚ノ

思有リ彼力申ス事大小事共ニ屋形承禎

吉事ニ副成シ萬彼一人ニ評定サセテ餘

人ノ申事ヲハ不被用後藤モ江家ニテハ

大名ナレハ威勢ヲ暮ノリ一門家老ヲ指

越テ家中上下ヲ已カ下ニ立ント欲ス已

カ心ニ叶フヲハ賞ヲ申與罪ヲ免シケレ

ハ江家ノ侍半過テ後藤ニ隨ヒ付ケル

蒲生氏郷記云須田伯耆ト申者蒲生源左
衛門力陣所ト走入正宗逆心必定ノ間明
日之御勸ヲ被相止三宗為幹可御覽候高
清水ノ城モ明退由聞工候旁以御勸可有
御延引候猶以子細ノ夕ニ可申上候ト申
中須田親ニハ正宗親父照宗ノ代ニ相馬
境ニテカキアケ城ヲモ被預家老脇ニモ
罷成身幹ニテ照宗二本松ニテ討死ノ刻
須田父追腹ヲ切候間其感モ可有之處ニ
左ハナク狂氣シテ切候ナトト申成シ今
我等ハノアテカヒ無曲次第ニ付テ斯申
上候

武林雜話云 三老西里 中老公桐山丹波守ト申
里但馬守高麗陣 中略 荒言也 黒田長政
其見也トシテハ但馬荒言者トシテ
北ハ家守ト娘婿ト侍ト及ルリ也

分判うらふとて、中の孫を傳へし遠祖方に
ありしものなるは押移りしにせらばもつくまじ候
云下任と申すは、中の孫を傳へし遠祖方に
茶田流と申すは、中の孫を傳へし遠祖方に
及しとて、中の孫を傳へし遠祖方に
小おしと申すは、中の孫を傳へし遠祖方に
右の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に

中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に

抄中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に
中流の流も連りけしは、中の孫を傳へし遠祖方に

年寄 又稱首名

老中

大老 又稱大年寄 又大家老

中老 又稱小年寄

若年寄 又稱若家老

武家名目抄第十四册

職名部六下

年寄 又稱首名

源平盛衰記云

頼朝重衡 對面條

佐殿ノ屋形新ク

造テ未門ヲハ不被立中寢殿ニ引キツ

ケテ内侍九間外侍七間十六間ニシツラハレ

夕リ内侍ノ上十二ノ間ヲコシラヘ中ニ

障子ヲ立切テ六間ツニニシツラヒ上ノ

六間ニ高麗縁ノ疊ヲ敷キ三位中將ヲ居
ヘ奉ル内侍ニハ國々ノ才ト十大名並居
夕リ外侍ニハ若侍其數来リ集レリ

御産所日記云普廣院殿祿由時若君所誕生
永享六年二月九日寅刻一若君祿伊勢殿宿而
に所産有_レ時々管領彼而式法引出物斗を_レ上
之_レ外大名遠_レ由馬由_レ太刀斗_レ所折紙以下事ハ
左時宜_レ言_レテ被_レ進上者或近習輩皆々每度仁

金覆輪進上大名所内仁人ニシテレタル才ト
十八皆々由_レ太刀由_レ馬由_レ折紙十二トを_レ上_レ所
太刀持太刀也

書寫山藪記云改_{赤松}則_レ所他界之後京都_レ注進
之_レ状左京太_大丈遺跡事息女松_{瑞松}所_{院殿}料人
與同名刑_大太_大補息男道祖松_{院殿}九_{祥光}申_{院殿}合_{院殿}下_{院殿}為
家督之由讓與之状分明此趣則可致言上之
處毎々忘却依之條于今遲々更_レ非_レ誅略_レ以_レ存_レ日

如此相定置山條一門并年号等名同公仕は茲本
 今少五靜以人體下上は先可然換は披露可
 畏入は忌惶得て明應五五月十三日伊勢方へ
 下野方別貞別可加賀方別治浦上美化方別宗
 小寺加賀方別職薬師寺越前方貴能梅別貞
共は赤松の二門方り別宗別職貴能方皆他姓にて
 家人るれは本文に年号とてふは六の三人の事なり
 佐竹家譜云義憲實上杉名越憲定ノ嫡子
 聳養子トナル御當家へ御出候てモ御一
 代ハ官領職ヲ御勤也其後御次男上杉實
 定公へ此職ヲ御名代ニ御定御文書御重
 代マテ御渡候得共上杉ノ老名長尾納得
 セス仍テ無其儀
 年中定例記云三月廿七日畠山殿へ御成始
 定日ハ形一是は年中れ諸家への御成かき書
 たる物ヲ在之年号ハ入るるおとれしき
 者涉目小かりとあり

伴勢貞満筆記云細川家年寄元分如以沙書得而
頂戴亦存以沙書一腰沙馬一疋被陣領外畏入
存以仍沙書一疋を上仕以以方之取由被露
佐以之沙書之橋度 吉良 織田度 武丹下度 畠山
、度 石橋 塩屋越前度 山名 延永度 一色、
度 温川 东条度、温井度 畠通 垂水度 北畠
按高橋以下十人各系注有
記之—家々の年号なり
又云、護代元并年寄元宿所沙返被 土沙書

土岐家聞書云當方を屋形と云事—當家より
於てハ子細に写す事と云、但他家へ對して
主仁を屋形と云事ハ多礼なり、之度領の者と
主仁以屋形中他家へ對してより、事々、斟酌
する事なり、と云、の年寄元ハ中々、と云り
簡禮記云三職四職ノ内年寄衆江ノ事進
之候タルヘシ然レトモ多分草ニ御宿所
ト調ル儀勿論ナリ又依人打付書ニモ可

調之

産所記云引目射不人と家の年寄より射させ
此事より引目射不人より射させしは此
心なり

伊勢貞順記云貴人の出射の時々をきけをとも随
其秘をいふは方清沙汰の出射の言はれ同く又
親於等しく可有款子程の仁神等時ハ其家の
年寄分の人仕の常此なり

伊勢貞満筆記云家子元寺護代元と彼友其

内のおとろむとの元ハはらう字のなるといふ

樋友——夜をく 内 香川 弓庭——夜をく 内 夜

言本——夜をく 内 安富 夜久——夜をく 内 薬師

以外長塩宗良香西寺町内者より都代
代友がともハ同前

細川高國亭御成記云大永六年月日涉子

長元寺町但馬守長塩陸民部丞香西四郎左衛門尉
安富亦次郎大田對馬守波多野孫右衛門右
何進七年寄元何

大鍬常興記云天文七年九月三日早朝日行事

豆州來臨先由案内在之由内該海老備主役荒礼於

來入三洲掃部頭狩野左京亮有人依不并云

の暇帝之官下下否之候に對詰元英中次元

尋下之有足等之松神由配當之候年寄元

可為存知之條に成由尋由候下下我由數之りハ

可令勤仕之由中ノ官各之為暇之候各病下之

云上之由縁阿を以之候也

捲川親俊記云天文十一年三月十六日丙申道運

由上洛自貴殿二荷而程よりせりて西國之候

就志多寄元二三人被中送之彼内記之候

を了れ於此度候之不及是始也上之三月十六日

捲川大和入道殿

按大鍬常興記及之りて不
年寄ハ評定引舟の寄元也

光源院殿御元服記云天文十五歲十二月

十六日定頼義賢被渡湖於樹下宅被奉待

向也御門警固役目加田次郎左衛門辻堅

同年寄播崎太郎左衛門三上孫三郎三雲

新左衛門蒲生下野守令勤仕候事梅本六
修木家

の年考
あり

三好義長亭清成礼云涉礼三申上次才貞孝

披露之九献目之涉礼三申上之三好通化三好

三好日向三好三好下野三好三好弓分三好

三好帯刀三好一藤原三好一腰涉馬三好

也加地塩田奈良石成年波堂間和久三好養

寺町右の十人三好十一献目之涉礼三申上之貞孝

披露由馬由右刀三好之礼三申上別於涉度補

法通三好一右京兆供有人池田八高三好多羅

尾左近大夫三好之礼三申上是筑州三好之讚州

右了以及如同前三好之評談之寫然時片彼由元

御成之時ハ右京北年寄出礼_ハ中上事_ト爲
旧例_ト寫如_ク以_テ在_ル云々然間筑州_ハ九十人_ノ出礼
の後彼_レ有人_ハ出礼_ハ中上_ト通_ス下_ル云々_ハ御盃_ハ
別_ニ出_ス也 按藤原より寺町に至り
十人ハ三家の年寄なり

朝倉義景亭御成記云永祿十一年五月十七日
於越前谷朝倉左衛門督義景亭へ御成事一
於會亦系ル進物并献立の次才十七献_ハ御鉦子
不系_ハ以_テ同名_ハ元年_ト也_ハ御太刀_ハ御馬_ト也

御礼_ハ入也一同名_ハ元御礼_ハ次才 姓名一季寄元
略之

次才_ハ前波魚住梅井青木隼人佐梅野万鶴
院^美并山崎

多胡辰敬家訓云朝夕仕_フ者ニモ其心得
ヲナシテ人ノナキ時_ハヒサヲ立サセス
目ヲカケ仕_フヘシカリソメニモ客人ナ
ト有_ニ時スイナルサマセマシキ事也_ハ
ナシ内ノ者ナリ共トサマノ者ハ千カフ

へシ又家中ノ年寄ナト々申者ニハ主ナ
リ共禮有へシ殊ニヨリ牢人衆ナト々テ
拘候ハシ人ノ事申ニ及ハス

又云人ヲ仕フ事何カシ殿家ト其ウツロ
ヲイフ事作タル家ノコトニ主人ハヤ子
ノ心ナリ親類ハケタハリノ心ナリオト
十代官ナトハ柱ノ心ナリソウ者取次ヲ
シ面ニ立テマハル物ハ面ノ戸心ナリウ
チウチニテハシリマハル者ハ内ノ戸ノ
心ナリハシリマハラス共アル物ハコミ
カキノ心ナリ百姓ハ疊敷板ノ心ナリイ
ツレカケテカ其家スナホナラニ先柱ニ
ナル内ノ者ハウハイラキラフ事大キニ
曲事ナリ柱一本ニテハ家ツクラルヘキ
カ柱多ク立タル家ハツヨキ物ナリ
又云今カ世ニツカハル々者貴モ賤モ一

年一年ニクライヲ持アケ身ヲ持ントス
ル事大キニ曲事義澄サマノ御代ニ武田
御相伴ニナリ又義植サマノ御代ニ大内
御相伴ニナリナトシテ昔ノ法ヤフレテ
ヨリコノカタ上ナシニナリ天下ミタリ
カハシクナルシタミノ人モ葉ニシタ
カフ露ナレハ其心有ヘシ一年ミミ家
ノ年寄ニナリオトナニナリツレハカロ
カロト主ノツカハシ人有マシ禮義奉公
ノ仕ヤウモ有テヨシ薪トル程ノ者迄モ
今カ世ニハ身持負スル故ニ思ノ外ニ世
上風義惡敷モアリ五穀モ不シユクシテ
心ヤスキ事ナシ

甲陽軍鑑云

氏真没
落條

氏真公は旗本ハナリともつ

て一戦ありしにれも氏真公も早く駿府志
由殿一はなりの今川の一はしれ給は素未未夫

湯城臺所長...
わたりを思初忠...
中上るハ朝比奈...
あれと申す

見聞雜録云中道寺平野...
安土日記云天正六年霜月廿三日總持寺
一重テ御成次日 廿四 二刀根山御取出御

主人平野中道寺をおて出...
濫其恥...
安土日記云天正六年霜月廿三日總持寺

見廻トシテ御年寄衆計被召連
太閤記云 信長公由父子 信長公之弟吊トシテ

又吊合戦子秀吉上洛...
又吊合戦子秀吉上洛...
又吊合戦子秀吉上洛...

由沙汰之然ハリ人ヤト隆景おつゝに誅けきハ
満座黙止してり

惟任征伐記云秀吉所生元是非貴然將軍信長
推舉蒙御恩惠事曾以無其比類剝相公第
五男御次丸為猶子被下所也然者秀吉同
胞合躰之儀也不可無御葬禮乍去歷々年
寄衆殊御連枝多之依之一端省其憚至十
月不行法事
按安土日記以下三條ハ
織田家の年表あり

多聞院日記云天正十三年四月廿五日宗義從
越前歸了惟任長秀ハ煩大事大ニハレ必死ト
覚悟シテ病死多念トテ去十四日ニ腹ヲ切り
終ニ十六日ニ死了多比類働也初ハ秀吉ハ可
得由之ハ多老元ニ中並子丸ハ年寄元異見
次才ニ在リ多遺言堅固別造物ヲ秀吉ハ
悉ク之ニ大ツ由知リノ事ノ事景底見了中
以由返答ト申シノ事也

西國發向記云中村式部少輔堀尾茂助一
柳市助山内伊右衛門雖為殿下股肱臣為
秀次家年寄與之江州府中八幡山定居城
殊以名地也

松原自休手録云内府違ノ条々一五人之
奉行五人之年寄三卷ノ誓紙連判候而無
幾程年寄共之内二人被追籠事一五人之
奉行衆之内羽柴肥前守方之事度々誓紙

被遣既ニ身上可被果之處ニ景勝人質ヲ

被取追籠被申事

按以上三條ハ豊臣
家の年寄也

大友記云石松源五郎ハ戸次道雪ニ對面
セントテ立花ノ城ニマイル道雪出合色
色物語ナトニテ豊州御仕置ノ様子委細
ニタツ子ウカニヒ候其後御年寄中へ申
入度子細候折節其方マイル候事幸ニ
存スルナリ尤書状言傳申へク候へ共心

事不殘申含上ハ其迄モ候ハス能ク老中
へ申達セラレ候トテ一々物語イタサレ
石松口上ノ趣委細ニ書立一義統様御事
若上臈様ニテ御座候へトモ毎事御政道
信御慈悲ニ御座候由ウケタマハリ及ヒ
千秋萬歳日出度候彌各諫御申サレイサ
サカモ非儀ノ儀御座ナキヤウニ宜法ノ
筋目被召行候ハ、惡吏シリソキ可申候

萬一上様ノ御思案タカヒ申儀御座候共
御年寄中以御談合タトヒ一旦御折檻ニ
アツカラレ候トモ各御異見御申候テコ
ノ御本意タルヘク候

播州征伐記云長治被切腹三宅肥前入道^{別所}
治忠首打落入道叫曰此前預御恩輩雖多
之此時御共申人無之某愁^愁乍生家之歲寄
更不及出頭述懷雖餘身御介錯之人不見

之然者御共申テ腹十文字切割繆臟死

安土日記云天正十年正月廿一日備前國

宇喜多和泉是亡病死候中跡職無相替之

旨上意ニテ家之年寄共ニ八一、御馬被

下忝仕合ニテ下國

家忠日記云天正十三年十月廿八日相列上

此為老之亂亡人之起落文々々々首長人の部

國亂長人の起落文々々々首長人の部

東亂記云氏政氏照五三年以來宗仁ト申

數寄者小田原へ下テ茶湯ハヤリ御屋形

ヲ初メ諸人弄之御一門衆年寄衆異風ノ

茶湯トテ或ハ順禮ニテリ俵ヲ荷ヒ或ハ

行人ヤ薦僧ニテリ茶屋へ入事日々也

伊達成實記云紀伊守ヨリ使ニ大越備前

ト申モノ右馬頭所へイク度モマイリ候

條大越備前ヲ可指越由紀伊守所へ申遣

條^候即備前マイ^リ候間田村ノ様子相々ツ
子無腹臍物カ^リ申候^中備前マカリ歸
候^テヨリ紀伊守三春へ出仕ヲ止城ニ引
籠不罷出候間田村四人ノ老衆ヨリ使ヲ
立^イカ様ノ儀ヲ以不罷出候存分候ハ
申へキ由被申理候
又云六月末ノ頃事ノ外暑時分家ノ公御
陣所ノ下ニ清水候筑前殿衆其水ヲ汲申

廿^レ候多出不申水ニ候故家ノ衆防ノ處
是非汲可申由申カラカ^イ候^中政宗公年
寄衆二三人被遣雙方ノ衆ヲ押へ候迄ニ
テ連々雙方遠^カリ無何事罷歸候
會津舊事雜考云文祿四年二月七日氏郷
薨京師九日氏郷之^不還賜秀行御定之^一
條々一會津宰相事不慮相煩死去不便思
台候然者宰相別而被掛御目候條雖為幼

少跡職鶴千代被仰付候事略中一城持共其

外年寄共万鶴千代疎意有間敷候旨誓紙

仕可上之是右條之家一利家并民部卿法

印淺野彈正少弼可申候二月九日城持十

三人五手組六手組七手組朱印抄上七條
八織田豊臣

御家の時大岩諸
家此年あるを

清須分限帳云御家老一万石小笠原和泉

守一万石富永丹波守一万四千石小笠原

監物持組五千石阿部河内御年寄三千石奥津

分右衛門持組四千石松平石見四千石松平

攝津四千石奥山大膳四千石小笠原伊賀

持組千石小笠原土佐同上千石高林内膳

當代記云慶長十四年二月五日清須衆有

讒者可被改之ト清須年寄衆駿河へ被

台連自駿河小笠原和泉守于時下野可上
國風間居

由被仰遣此以前清須儀好悪可被糾由二

付如斯三月廿六日清須年寄并小笠原和
泉守事今日又甚腹立シ給是併依讒言也
和泉ハ去正月ヨリ下野國風間令并領彼
城ニ居ケルカ知行被旨上國ヲ可被拂卜
也富永加賀守攝津守石見等者國ハ被拂
間敷卜也但知行ハ被出間鋪由ノ仰也小
笠原和泉守富永丹波守松平攝津守松平
石見守何レモ清須ヲ罷立上ハ近年彼衆
同心ノ者同親類縁者等悉清須ヲ可罷立
由被仰出所也五月八日此比於駿府右兵
衛主常陸主ヲ請シ及配膳本多上野介松
平右衛門佐成瀬隼人永井右近安藤帶刀
等也是何モ近習中年老也十七年三月廿
三日岡本大八卜云者有彼大八九州長崎
ノ有馬修理儀ヲ於駿府取持者也自修理
方金銀ヲ於指越ハ各年寄衆并女房衆江

遣之彼取成ヲ以九州鍋嶋知行中ヲ三郡
申請可出ノ由偽テ申云々十一月廿八日
於江戸新城越前國年寄本多伊豆守ト今
村掃部清水丹後何モ傍輩及對尖兩御所直ニ
聞之給十八年二月青山播磨守元藤右衛門死
去是ハ將軍幼少ノ時悉皆ノ年寄也十月
弓氣多源七郎久貝忠三郎後大御所勘當
是ハ先年伯耆國中村一學死去ノ時為上
使被遣彼一學遺跡被台上諸道具ヲ如何
可仕旨江戸言上ノ處幸大久保石見守石
見國へ下ル時分成ケレハ石見方へ可相
渡由將軍依下知儀款江戸年寄中ヨリ狀
ヲ遣間任其儀石見方へ相渡此義ヲ今曲
直ノ由ノ玉ヲ如此

按年寄といひ首老といふ皆長老の稱行
て首老といふは長老の稱也

あつては勢に似るりけ、世間なるを
後世よりとりて、長者は年のかみ
びんふを職をうけゆるその、職名と
なるは家可敷の時ふ評定を富老といふ
引付を中老といふ、又ふふ、あをす
この年とと稱を、この、ん年とといふ
分を、字の刻意なること、心を以て、

徳倉殿の時、長者を年とといひ、こと、す、
は、あ、時、お、大、長、といふ、年、あ、い、

の、こと、なるを、思、い、た、日、の、強、強、
年、と、い、ひ、こ、と、なる、も、大、し、 南時大老

諸家、家の長を年と、首名、と稱

又、家の年と、いふ、は、幕府、も、

は、稱、ある、故、なる、室、所、あ、う、評、定、引、付、あ、れ、
を、首、名、と、い、ひ、こ、と、い、ひ、

あ、見、た、り、思、い、け、り、後、長、は、
の、こ、首、名、の、稱、を、い、ふ、あ、い、ん、 首名

刻、讀、く、お、ひ、さ、い、お、ひ、と、呼、く、お、あ、と

こ、な、り、又、お、う、と、な、と、い、ふ、は、年、と、大、人、の、名

な、り、富、老、の、名、を、い、ひ、頃、く、お、と、お、と、稱

了 略なるたるを 原年感妻記よりある大老の作と
對へ記するを認めざるなり

首名又老名の字を用ひたる様な於て

其あること亦 室河版の中はまゝに 諸家

何れも年表の首名の稱ありといつてお

年表といふものもたゞく首名の稱を

幾外遠國は強ひておこなせり 歳外遠國といふ
事あり

あつた東にまゝとて人としてあるが故に俗

一姓の長を稱し首名といふこれ遠國は

然るに文禄慶長より後に諸國大なる歳

内中國の風となし何れの家も年表とい

稱するたゞしとすなりぬ所これ家老を中の

職たり又を世に家老と年表のよの位

をなする家もあるといふ年表の内中一

籍の者をも家老大をりて稱し中老と年

表といひも獨を若家老の年表の又を

をりたといふもの類しなる也 後例が根拠は
家老十一人の

内河原河内をの年表といはるは早きに
政勢よりついでに若用をたせりけんと年表獨

も長しき子孫なるを以て家老の列に如く
しるすに用ひしるすに如くしるすに如く
なるに如くしるすに如くしるすに如く
しるすに如くしるすに如くしるすに如く
しるすに如くしるすに如くしるすに如く
しるすに如くしるすに如くしるすに如く
しるすに如くしるすに如くしるすに如く
しるすに如くしるすに如くしるすに如く

老中

鎌倉年中行事云二月八幡宮ニ一七日御
參籠社務社家奉行出仕政所問注所御所
奉行其外宿老中廻廊ニ幕打參籠アリ
狀快元僧都記云天文二年五月六日北條彦

次郎窪田豊前其家中宿老中悉来數日被
為運土三年六月所領役ニ各家老中去年
造營之出錢被仰付諸侍神江之奉公為
末代之龜鏡之間一點無物惜云々
叔井日記云丹波勢攻當家ニテハ每度氷
上ノ御館八上ノ御館へ御一族家老中七
組七頭先鋒家國家等ノ宗徒ノ面々ヲ召
廿セラレ密事ノ御評議トモノ候

大友家教刻書云國祚を承りてを老中と号し
る事不審之故也其故を宿老と申人の先師
を尊ぶる事能く志す御家のかゝる記を習ふ後
のよせはま或は後の事とすまゝの或諸侍等の
尚しその形を印のより人なきもせしむる
人なきも老中没終成る事あり今附の記を
皆必承りて世に傳ふに恨むる田舎人なる
誠谷一乃名あり人んぬ物もたふ事よる事
能事の有るに於て然とす自然のおもえそ
ゆき馬より其内より其意をとりまゝあ
りの人なきを撰りて加判書とす
又云老中申次不^レ退而を名^レ堪思なき事法
的故子細也誠是もよく御思ふたゞぬ故
まのふらま色ハ其故を以ておしうへ
事をも宿老申次共々^二信付家ハ知ぬ故
て心身汁を合せて世に承りて幸慶も勿^レ忘

ゆくり〜くお家も安らぎありしを^熱想ふ所不知
きとそもて能事ハ一りもたうあるも小作の何れ
た〜ぬ者共を以て大車の後をもは依格毎
逆よおぬゆ〜故老中も自筆をせつり先はま
何〜きを〜くふ後あり〜もの判るべきなりと
〜く流ぬちくさ〜ふを在宅あり也

大友記云石松源五郎ハ戸次道雪ニ對面
セントテ立花ノ城ニ參ル道雪出合色々
物語ナトシテ豊州御仕置ノ様子委細ニ
尋子ウカ〜ヒ候其後御年寄中へ申入度
子細候ノ間^{近日}飛札甘シツカハシ申ス〜ク
ト存候折節其方マイラレ候事幸ニ存ツ
ルナリ尤書状言傳申へク候へトモ心事
不殘申會上ハ其迄モ候ハス能〜老中へ
申達セラレ候へトテ一マモノカタリ致
サレ石松覺書仕候テコソ御老中へ具ニ

申上へキトテ口上ノ趣采女細書立

蘆名家記云 蘆名家 養子條 盛重會津へ御入城ノ

後家中家老中ノ出入最中ニハ正宗ヨリ

太寄金助ト云侍ヲ黒川ノ内大町柳ノ下

ニ風呂屋アリ彼者ヲ忍ヒニ用テ此所ニ

付置日ニ蘆名家ノ侍双方ノ争論ヲ聞出

シ正宗御へ羽檄ヲ飛ス 按以上後書ノ段ナリ 不或省老才トシ或

家老中トシ或老年家才トシ或老

室河殿物縁云 神祇 人條 之好日向与我身以人及

度系中入赤色ハ有指関々や之を京都ハ以

使札中けふ能致皆上ハ此中神良トシ神

人孫也お流中ハ依々以日有指字ナリ

境目を編ハハ計新関神神指ノ及ハ隣郷

此等新撰仕リ 釋 締己自廣々如ク國中ノ

強河々ノ迷惑仕ハハ付与此等ノ事知事

少飲ニトシ申ハハ何程向日平神ハ改句云所

老申近可上上之在名中ゆゑ同為要商の如し一
書也則小名留清之卯月之上我氏汝の補版
進至貞以ち後之好日向中我貞

又云 花の大奉願分保目の之事之付借気

日向中入海江しとしける言る使房を以て

しとしける言る一とて言る言る言る言る

除るく物と一とて言る言る言る言る

先白老申へまぬすやのへは言清かたりも

加官の人々上之はゆゑ申の事子集を遊

決り小實者言可記しとて言る言る言る

名留清之十月言大奉願分保系我貞

又云 依諸國能志劇分國小新関

を主河還の旅人毎とて言る言る言る

費人かのつとて言る言る言る言る

商家職をむとて言る言る言る言る

後地子後とて言る言る言る言る

之と云ふ京一同に抄められ御世と云ふ事
 京京の法も貴くあふ不得を非内親達怒
 仕の所も貴く家財を質あふ入るを法却を
 之と云ふ年を強きと云ふも粒取糧つと云ふ
 風湯も及ひ人足ふと云ふも元所云渡初む
 之と云ふ夜の夜ふ貴く家財加而慈悲を地政
 少教免少と云ふ難者と云ふ事也云と云ふ則老中
 扱見ありと云ふ是上同けを云方はと云ふ
 望日人をもとく修しけるに在世人等と云ふ
 家業此利を失ひ創湯と云ふもの也と云ふ便
 なるを先親たのみと云ふ由ありは常法院法行
 院の例に記さるる也此等よりいふ所を其
 之と云ふ御付け建人として承く則許定所と云ふ
 業文をかきける
 按以上之條よりいふ所の御中ハ
 許定所付の御中なり為付は其
 之をよむと云ふ老中の中と云ふ御中
 中といふ所の老中の中考中の御中を
 御中洞然長状云而不使之人と云ふ教免と云ふ

言或寺家或老中申中々後夜々波振露少能
之肘取取分るる旨深きは修史也

東亂記云 景虎小田原へ寄来條 景虎小田原ヲ滅サ

ニ為ニ發向トノニ思ヒケレハ是ハ由ニ

敷大事ナリ敵ノ近ツカサル先ニ大磯小

磯ノ細道ニ人衆ヲ出シ合戦ヲヤスヘキ

江戸川越ノ人衆ヲ出シ敵ヲ中ニ取コメ

西方ヨリヤ責ニナント々寄合テ評定シ

ケル大屋形氏康老中ヲメサレ仰ケルハ

抑今度景虎發向ノ事ニ付テ各々手合ノ

沙汰最ナリ云々

長曾我部元親百箇條云公事奏者事双方

令因該上と取可言上如先例老申志可有

遠慮事

大友記云義鎮公御クシ才口廿セ夕マヒ

宗麟公ト御名ヲカヘラレ候御一門老中

才モヒオモヒ法体トナリ御煩ノ様ナレ
トモ種々ノ御養生ニテ御本復アリ
大友奥原記云 五郎曹司 我儘ニ此長男
そなた條 五郎曹司我儘ニ此切の耐ニ此行ぬあり
くも習ふもやんも入るも 中略 なる事ふ付る由
おらおらと云ふ事と云ふ世にみだりあるはて老中
并此をなす事と云ふ事 中略 ありし事
たる大友ハ却と云ふへく 中略 歯牙は古は
すと 中略

蘆名家記云 關柴合 天正十二年五月十日

ノ夜伊達正宗檜原ヲ打立玉フ三人ノ老
中ヲ始其勢三千餘騎ニテ入田付ノ山ヲ
越へ會津ニ赴キ玉フ 中略 正宗ハ近習ノ侍
五百餘騎入田付ニ指置其身モ爰ニ居玉
フ三人ノ老中ニ二千ノ残り勢ヲ差漆へ
關柴カ城へソ遣シ玉フ

愚耳舊誌記云友人晏てふとて別を夜まは別
汁ふ右のあし志を御陣内へはつせおけと為
儀振ちつくと云はるの
中今より後ハ御と申す人
と云はる儀ハ御と申すも御老中へ御知色
なりと云はるの原の御と申す大事ふてふと申すけふ

一柳譜云天正十二年四月竹鼻御陣之刻
午之助殿市助様へ秀吉様ヨリ被遣候御
書寫竹鼻人數入置候由就夫此方人數赤
鍋邊へ可遣由池田老中ヨリ申越候條御
次人數二千許モ可遣候由申候然者青柳
へ越候人數ヲハ呼可通之由申越候

清正記云 朝鮮在陣衆ハ石田 小西播磨守
治部女輔不和條

行長ハ青柳志摩守とおはし一騎馳在陣中
越後をさるるとはゆはるはあまたつきてし
まはるめ書物をとつてあむ人の名へ出あつる名
をわらふと云はる甲斐守加賀守を被ちけ人

の海を平らつてさくき物のうらひに一人のふくま
りるに約集を小島ち原とを解その上か
りの書物言説より及ぶとお侍り小島海^落及
てを傳ふまを之あ人の忠家も中へこしと

松原自休手録云岡崎ニハ落力此上ハ一
門ヲ頼候清康ヲ督ニシテ岡崎ヲ可返ト
云ニ一門老中僉義ニテ彈正左衛門味方
ニ成候へハ大幸也トテ頓テ嫁^娶聚アリ

慶長見聞記云治部少輔伏見へ忍落タル
由七人衆へ告ル者アレハ何モ出シヌカ
レタリトテ仰天不斜頓テ伏見へ追搦候
へ共城へ可入様ナケレハ向島ニ扣へ此
由ヲ家一公へ被申入依之御家中ノ老中
相談アリ

板垣卜部慶長記云慶長七年小治津中將
伏見へ忍落集上合戦也勝其年々忍長に

下は後多上りたとも申ゆハ親伯の爲ふハ増ふ
多子古厚以実子なり記御之実子形くして孝子
也古厚以実子合戦中敵を討ちたり故ふ中よりけり此は
付る違系より此は是なり此は此の世に此の世に
中少紙とも記すなりを頼ゆと老中へ記すなり
等なり

古厚知貞私記云慶長十九甲寅年大坂陣

之は指揮様御供御申中多上野外松平右衛門

大史板倉内膳正秋元但馬守台徳院様御供

御老中酒井雅業氏組中多依後守同古井

大炊氏同安斎對馬守同

梅吉中とい老臣をす人々稱謂する一々

老臣と云ふ同
僧徒を稱くは中といひ古厚
を古井といひの類たり

古稱古代より流れてくるなり一室何處の事か

よきなり幕府諸部より古室老中なる事の中

稱あり諸部より古室を中ともいふ事

いそゆる老中の起原なるを

幕府におおむねの稱を
中ハ賜ふ老中稱より

當時家町殿より評定引付のおをを宿老

中老よりより故おをを主人より時上略して

包中と稱大老諸家もあつて改して老中

とよふことそきつたり又た六年の中

とも主人理ふの稱りと定む。職名ハ

あつたりけるを後世より一室譜代の

と位なるは仕奉の者といへとも尚改替ふ能は

加判小列をるを以て老中の推なるく老中

とよひるより漸く職名に稱とたふし

類たる理 但中の中ハ老中を主人よりよむ

主人のよりハ年寄といふを中老といふ
こととも職名となるは後ハ主人より
も老中と稱するはことなきことあり

大老 又稱大年寄又大家老
又大家老

豊臣家譜云隆景謂我於秀吉無可賜大國

之親好是非其素心乎乃白于秀吉曰請以

金吾秀秋為養嗣我死之後使秀秋領筑前

國耳秀吉大喜而許之自此而後隆景受秀
吉之恩顧尤厚遂備五大老之列

太閤記云

諸奉行條

大寺宗家一卿加賀大納言

利家毛利中納言輝元備前中納言秀秋越後

宰相景勝けあ人を秀頼の心うし海人とし

勝下世を去りひなるとあつり頼入おり孫あり

有と秀頼の心切後の心か定あふり也

小松軍記云國安ウシテユソ天下泰平ノ

功ヲモ立ラレ候ハシツレ五大老ニ断有

テ急入國ラレ候ヘト三成指計ヒ言ヲ

巧ニ述ケレハ利長實モト思ヒ免モ角モ

面々ノ御指圖次第タルヘシト申サレケ

レハ三奉行斯ト披露シケレハ各モ尤ト

同セラレ飯國ノ夏ヲ赦サレケル

増補筒井家記云天正十五年三月九日松

倉豊後守重政伊賀名張ノ城ヲ去南都真興

福寺ノ内成身院ニ遊居ス松倉ハ元畠山
家ノ族臣夕リ父右近勝重筒井家人麾下
老臣トナリ數度大功在テ去年三月七日
ニ卒ス重政ニ大老職ヲ侍從定次屢命セ
ラルレトモ侍從ノ色酒ノ失ヲ諫テ不聽
ヲ怨ミ且桃谷等ト同職夕ラニ事ヲ怒リ
猶七父ノ遺言ヲ請テ今如此ナリ
里見義泰分限帳云ニヨリ百カ儀記名付金

大家老堀江能也也

中
按大老ハ御大家老ノ意ナリ之ノ元老ニ
シテハ此色共君ノ意ヲ補^輔依^レ大老ニ
等ノ事也之ヲ勢トシテ御代
トシテ及福倉ハ執權建禮者室町家ノ
之參願不^レ由^レ御代ノ及^レけ^レ御代
之^レ御代ノ及^レけ^レ御代ノ及^レけ^レ御代
ニ^レ御代ノ及^レけ^レ御代ノ及^レけ^レ御代

と候し又たその大なる事と云ふ大なる御家
はる亦け職ありと云ふも其人のりく、此を
其く致し、一乃、其を、一、を、其、上、に、し、り、と、云
中老 小止り、一、
其、其、家、の、御、代、の、御、年、御
其、用、御、御、一、と、云、其、を、輔、依、と、云、り、の、一、即、大、老、の
職、考、た、り、と、云、其、一、の、一、と、云、其、職、考、た、り、と、云、
其、一、と、云、其、一、と、云、其、一、と、云、其、一、と、云、
其、一、と、云、其、一、と、云、其、一、と、云、其、一、と、云、
其、一、と、云、其、一、と、云、其、一、と、云、其、一、と、云、

中老 又稱小年寄

季瓊日録云文正元年七月廿五日公文奉

行次第之事以伊勢守被尋下于諸奉行
中仍飯尾肥前守被仰付様者普廣院御代
飯尾肥前入道并加賀守勤之然則不依上
頭只中老人衆依其器用歟之由申之仍披
露之

鎌倉年中行事云八月朔日八朔御祝卜号
御連技様方護持管領奉公外様當參之人
ハ不及申在國之方、ニ、モ、皆、御頼進上

早且ニ宿老中へ近臣為御使急ニ有出仕
テ御劔可被申替旨被仰出ノ間則皆以被
參唐物ハ中老被替宿老中老申継於殿中
御食ヲ被給御返御劔唐物等申継人ニ持
セテマカリ出代官ニニ請取セテ後大
御所様進上御返モ皆代官給テ其後代官
各宿所へ罷歸 揃上ニ條ふ事取の中ニ條大
むと京儀表の引付をなす
松陰私傳云子細承取らば長尾中老以前

對國勢如中老中廊内ニ為御中老將軍
地蔵之主所景儀前皇ノ旨於テ是海軍
於之毎長テ後移時計也モ危急ノ事此限
明日ノ内ニ可勝事此等之なる軍の門不火
者あり傳授形儀出動取ふ可給なりトモ急
ニ序中並宿老中老皆々之是處の物申こと
御指止若急以下松陰之モ是なる事あり
其陣ニ各急方よりと若急なり

甲陽軍鑑云

後天代寧人
名氏道名人條

古原右馬守之丞ハ

今九代あると申仁氏田家の中老之

見聞雅縁云け弟乃成傳也云服式部と申

中老の物切也云しつ肝を清くおとす取の事

も亦一年くふお代なり成を宗強之の事

しつ中老と成實成の謙信へおと後上

慶長見聞記云奉行衆ヨリ家一公へ申分

事慶長四己亥正月廿一日ニ加賀大納言

并奉行衆ヨリ使トシテ兎長老生駒雅樂

頭御屋敷へ参リ大閣様御他界已後數月

不經縁邊之取組我儘ヲ被成ノ由直ニ理

申上ル奉行衆ヨリ大崎少将政宗福島左

衛門大夫正則蜂須賀阿波守家政等へ使

了リ其趣ハ各へ相談モ無之家一公ト縁

邊ノ取組御掟ヲ背キ不届之由也云々此

時ノ年寄衆ハ家一公加賀利家毛利輝元

秀家景勝五奉行人德善院淺野彈正增田
右衛門長束大藏石田治部中老ハ生駒雅
樂中村式部堀尾帶刀三人十リ大閣様ハ
御遺言ニ年寄衆奉行衆其外人仕合有之
時ハ生駒雅樂頭中村式部少輔堀尾帶刀
扱ヲ致シ下ニテ事濟申儀ニ候ハ可相濟
ノ由御仕置候ニ依テ堀尾帶刀ハ子息信
濃守ニ秀一公被掛御目帶刀又家山公別
而懇ノ故井伊兵部少輔ヲ以テ御扱ノ様
子ヲ節々得御意扱公儀ノ趣ハ雅樂式部
帶刀為三人扱ヲ致シ家一公御理運ノ様
子拵相調二月五日互ノ御誓紙相濟家一
公被仰ニ依テ其両方ノ誓紙帶刀預置申
候

大岡記云 諸君小年寄の儀生駒雅樂頭中村式
部少輔堀尾帶刀先主計三人と大年寄の角不

を初と不細成事有るは此後ある方へ強く
強めを遂へしむる等く形おぼしむる者も也

松原自休手録云伏見ノ城不空可置内府
御移尤也十三人ノ中老執之奉行家老モ

同之三月十三日被移城中

武林雜話云 黒田長政 有年白き切々紀志取人

村田相模堤九郎左衛門中者の門よまたりお將

使を以てする白き切割志るひを某指物そひ

西存たり心給て下り止るへとつけま堤の中

抄より昔此事ハ不致法流の補礼の時ぬ水極

九郎西後向し御け指物も此供仕中居は時

ハ念れま月を西へ色山然時を某指物小極り

し月を方止ぬ流へと 中略 始ハ双刀とつしき者

とも是身仕ぬ共関入不中後と申は中老云

多ふ是身仕ぬ九郎川不はけ指物を申老云
の内よりそとけさる不及此所中申は事小

成中時代はと有るは存生る因よをて事は
種ふもあがましむせもあふりやしむ

按室所殿の世に引付るを多く中老といふ
あも評定を志を有るをいふは流しは時頼

徳倉殿の時より
中老の稱を有る 南時大右衛門もあまた

なるいふは南時中老の稱を設くもたはる
家督を指するを後をいふは南時家の時ふ

及のくは職之を定るを大老中老
まはるといふものまはなりを大老とまは

とたたりは勢を執りしは軍國の候府
一應の勢を執りしは中老と

其階級をりの上ふありは政事ふ執るす
いふも定るは職者あり侍ははくは見え

を加るを以ては勢といふはふくは年寄の
とも候するは大老を大老といふは對する

稱謂するはと有るは徳家の格式ありは同矣

ありて或は夫老を家老といひ中老を其
年をいふ人もあり又夫老中老をいふ人も
あり夫老中老といふ人もありて一は其
所のちり

若年寄 又稱若家老

見國難福云信玄かしくと此等其甲別して
あつたの所理書書を請て其事をやま
氣の若きも其方ぬへ向度其方ハ若年寄と

中こそ可然そ但しおのふ小山田備中不忠と
也殿も其方何初と此をいふは天正元年より
誰かの諸士の支配をいふ所其理と小山田備中
とん換り侍不と申右太中へ信玄出陣
を云券尊若年寄と若年寄といふ

氏林雜話云 官書 又云 官書 形如

通ひハ左の事なれ其け此の在後遠却て其老又
由後より其事必是之を向くも其可なり

ある、南家の大事なるは是の子細を知るとも、
 家訓訓へ序旨私綴り、不知有、若年若元係
 此改元の合呼、白付眼のさたし、事と見
 えす、の狼大車のおま、さあ、
 云あへ、

宝見義孝の限帳云、九百六拾七名、
 若家老板倉大炊介

拙若年若元又若家老といふ、
 大炊介

左文 老小対する様相なるを、
 すま、徳倉室町支家の時を、
 とを合せ、職掌めく、
 といふもの即こゝなる、
 家を以て大若家、
 或、
 或、
 或、
 或、

甲陽軍記 小島貞
 徳倉室町支家の
 此の文は、
 此の文は、

武家名目抄第十四冊

すくはむ世にあらまのふ年福の改めよ
よしす才選をゆくを申せし向もあま
米若くはを申あるはあまは御学
のあまはたはよおまひ百事をなすま
す御たのの改めあまのたなりしむ
たの

